

長野県木曾郡上松町

も ちゅう うえ  
最 中 上 遺 跡

— 県道改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —



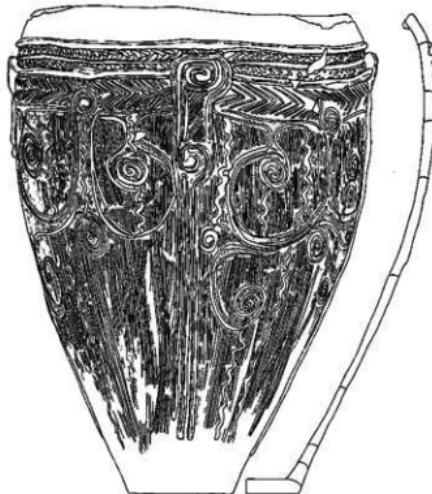
1993年12月

長野県木曾建設事務所  
上松町教育委員会  
木曾郡町村会

長野県木曾郡上松町

も ちゅう うえ  
最 中 上 遺 跡

—県道改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—



1993年12月

長野県木曾建設事務所  
上松町教育委員会  
木曾郡町村会

## 序

上松町には多くの遺跡の存在が知られていますが、中でも今回発掘調査を行なった最中地区周辺は、昔から地元では有名な遺跡で、多くの子供たちが「矢じり」や「土器」を拾っては、考古学への興味を広げていった場所であります。

しかし、過去において本格的な発掘調査が行なわれることもなく、現在に至っていたわけですが、この度の県道改修作業に伴って、ようやくその概要を知ることができました。

今回の発掘調査にあたっては、指導を木曾郡町村会に委託をし、作業は地元の皆様の多大なご協力をいただき、予定期間に内に極めて大きな収穫を得ることができました。

おかげさまで、当町では初の発見となる集石炉や、縄文時代中期の住居が発掘され、押型文土器や土偶など、当時の人々の生活の様子や他の地域との交流を具体的に知ることのできる、貴重な資料も多く発見されました。

出土した遺物の整理についても、引き続き多くの方々にご協力をいただき、さらに檜川中学校の神村透先生には、ご専門の早期押型文土器の分類について多くのご教示をいただくことができ、ここに、町では初めての発掘調査の報告書としてまとめることができました。

この度の発掘調査に際しましては、ご指導頂きました先生方、作業に従事して頂いた皆様方、地区の皆様、さらに県教育委員会、木曾建設事務所をはじめ、多くの皆様のご協力を頂きました。

ここに、皆様方に対する感謝と敬意を申し上げ、序文といたします。。

平成5年12月

上松町教育委員会

教育長石原初雄

## 例　　言

- 1 本書は平成4～5年度に実施された、長野県木曾郡上松町大字小川397番地付近に存在する最中上（もちゅううえ）遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の名称は、事業段階では最中遺跡としていたが、從来知られていた最中遺跡とは一連のものではなく、最中上遺跡の範囲内にあたるため、本書では最中上遺跡に統一した。
- 3 本調査は県道改良事業に伴う緊急発掘調査であり、上松町教育委員会が木曾建設事務所より委託を受け、木曾郡埋蔵文化財調査実施要綱により木曾郡町村会に再委託して調査を行った。
- 4 最中上遺跡では昭和61年に、今回の調査地に近接する部分が道路拡幅工事に伴い緊急発掘調査されている。その時の調査の概要と、出土遺物についても本書に収録している。
- 5 本書の作成に当たっては紙幅の制限等により周辺遺跡等の記載については割愛させていただいた。
- 6 本書の執筆は第1章を村田広司、他は新谷和孝が行った。編集は新谷が行った。
- 7 本書の作成に当たっての諸作業は、大戸美恵子・尾崎俊子・久保寺すみ子・小幡和枝・近藤登紀子・佐々木満・徳原トラ子・横道ふさ子・丸山アツ子・新谷和孝が行い、角張淳一・竹原久子・永井節治・長谷川玲・松尾明恵・宮嶋洋一の協力を得た。
- 8 調査・整理作業に当たっては、会田　進・市川隆之・神村　透・島田哲男・竹原　学・寺内隆夫・原　明芳・松田真一・三上徹也・百瀬忠幸・山下生六の諸氏より多くのご教示をいただいた。  
石器の整理作業は調査団内の対応が困難なため、㈱アルカに委託して実施した。
- 9 委託契約書・作業日誌等の関連文書類は調査結果の記載を重視したため、本書では収録していないが、出土遺物・図類とともに上松町教育委員会が保管している。

## 調査体制

調査担当者 新谷和孝（木曾郡町村会事務局埋蔵文化財担当）

協力者・機関

大戸美恵子・大橋貞雄・大給好美・尾坂　賢・尾崎俊子・織田　敏・久保寺すみ子・久保寺実・小幡和枝  
小林記一郎・近藤登紀子・坂上金次郎・佐々木満・清水　晶・田下良一・田方善次郎・徳原トヨ・林　勝男・  
藤村一雄・古瀬定一・丸山アツ子・丸山敬一・横道ふさ子  
㈲堀口建設・㈱ジャスティック・㈱アルカ  
堀口義行・大給好純・大畑直己・山田雄二・山田春樹

事務局 上松町教育委員会

教育長 井上純太郎（～H5・9） 石原初雄（～H5・10）

次長 山田邦旺（～H5・3） 橋本一郎（H5・4～）

社会教育係長（文化財担当） 橋本一郎（～H5・3） 村田広司（H5・4～）

# 目 次

序

例 言

目 次

## 第1章 調査に至る経緯

1) 調査に至る経緯	1
2) 文書記録	1
3) 調査日誌	3

## 第2章 遺跡の環境

1) 遺跡の位置と地形	4
2) 最中上遺跡の周辺を巡る研究史	4

## 第3章 調査の結果

1) 調査の方法	6
2) 調査の概要	6
3) 縄文時代の遺構	7
4) 縄文時代の土器	19
5) 土 製 品	30
6) 石 器	31
7) 平安時代の住居址	41
8) 古代・中世以降の遺物	41
第4章 調査のまとめ	42

# 図 目 次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 調査位置図	2
第3図 全体図	5
第4図 第3号住居址	8
第5図 第4号住居址	10
第6図 第5・8号住居址	12
第7図 集石炉	14
第8図 土 坑	15

第9図～12図	
土器実測図(1)～(4)	16～19
第13図～18図	
土器拓影(1)～(6)	24～29
第19図 土製品	30
第20図～26図	
石器実測図(1)～(7)	34～40
第27・28図	
第6・7号住居址	42

# 第1章 調査に至る経緯

## 1) 調査に至る経緯

上松町と三岳村を結ぶ県道才見上松線は、その奥に日本三大美林といわれる木曽ひのきの天然林「赤沢自然休養林」が広がり、近年は観光車両の増加が目立っている。また、広大な国有林より木材を搬出する車両も多く、交通に支障を来す状況であった。

木曾建設事務所では、毎年県道才見上松線の道路改良を進めており、平成4年・5年度においては、旧知の遺跡所在地であった「最中地区」の改良工事を行った。

本調査は、その道路改良工事に伴い実施されたもので、平成4年度には道路拡幅にかかる部分（I・II区）の調査を実施した。その際、II区の隣接部分の現道路下にも遺構がのびていることがわかり、工事の際影響が及ぶことが判明した。

このため、再度関係機関と協議を実施し、平成5年度にこの部分（III区）の調査を実施することとした。

## 2) 文書記録

### (平成4年度)

平成4年12月24日 木曾建設事務所長より県道才見上松線の県単道路改良工事にかかる埋蔵文化財保護について協議提出。

平成5年1月5日 最中上遺跡・田口遺跡にかかる保護協議を、上松町公民館において実施。出席者は、長野県教育委員会文化課、木曾建設事務所、木曾郡町村会、上松町建設課、上松町教育委員会。

1月6日 試掘調査実施。

1月8日 長野県教育委員会より木曾建設事務所長宛「最中上遺跡」の保護について通知。

1月22日 木曾建設事務所長より埋蔵文化財発掘の届出（57条2-1）。

1月29日 木曾郡町村会長宛、埋蔵文化財発掘調査指導及び技術指導について協議書提出。

2月1日 木曾建設事務所長と平成4年度県単道路改良（地方特定道路整備）調査委託契約締結。

木曾郡町村会長と、埋蔵文化財発掘調査指導及び技術指導委託協定締結。

上松町教育委員会より埋蔵文化財発掘調査の通知（98条2-1）。

2月16日 発掘調査、整理作業実施（3月25日まで）。

3月25日 平成4年度県単道路改良（地方特定道路整備）調査委託業務に関する完了報告書提出。

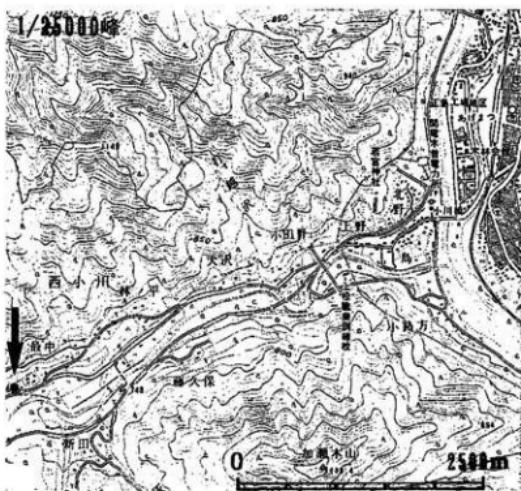
### (平成5年度)

平成5年4月8日 木曾建設事務所長と平成5年度県単道路改良（地方特定道路整備）調査委託契約締結。

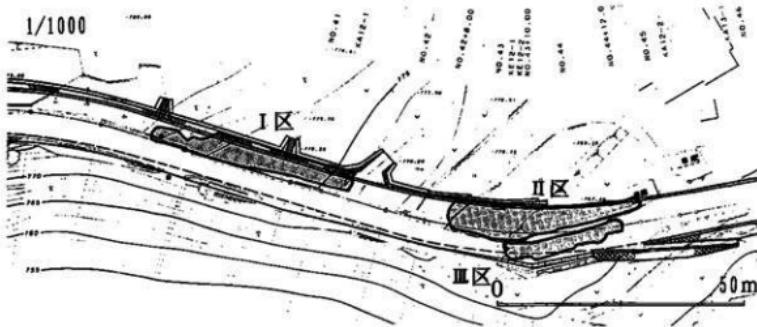
木曾郡町村会長と、埋蔵文化財発掘調査指導及び技術指導委託協定締結。

10月5日 例アルカと石器団化業務委託契約締結。

12月10日 平成5年度県単道路改良（地方特定道路整備）調査委託業務に関する完了報告書提出。



第1図 遺跡の位置（上松町管内図使用）



第2図 調査位置（トーンが調査地）

### 3) 調査日誌

(平成4年度)

- 2月5日(金)晴 試掘作業実施。
- 3月8日(月)晴 発掘準備作業実施。
- 3月9日(火)晴 重機による表土剥ぎ。I区の西側より開始する。
- 3月10日(水)曇・雪 重機による表土剥ぎ。露出した遺構面の保護措置・安全対策を行う。
- 3月11日(木)晴 重機による表土剥ぎ午前中でほぼ終了。午後より遺構検出作業を行う。I区の中央部で平安時代の住居址1軒を確認する。
- 3月12日(金)曇 遺構検出作業午前中でI区終了。午後よりII区にかかる。中央で绳文時代中期の住居址2軒を確認。
- 3月15日(月)曇 遺構検出作業午前中でほぼ終了。II区の住居址周辺より押型文土器の破片出土。午後より住居址の掘り下げ開始。
- 3月16日(火)晴・曇 II区の住居址の掘り下げ。5住の埋廃を確認する。
- 3月17日(水)晴 II区の住居址の掘り下げ。基準点測量打合せ実施。
- 3月18日(木)晴 II区の住居址、土坑の掘り下げ。基準点測量実施。
- 3月19日(金)晴 II区の土坑の掘り下げ、I区の遺構の掘り下げ実施。調査区内の基準点の杭打ち実施。
- 3月22日(月)晴 I区の土坑の掘り下げ、測量実施。
- 3月23日(火)晴 II区の測量実施。
- 3月24日(水)晴 現場の片つけ作業実施。調査を終了。

(平成5年度)

- 4月8日(木)晴 III区の遺構掘り下げ。
- 4月9日(金)晴 III区の遺構掘り下げ、測量実施。
- 4月10日(土)晴 III区の遺構掘り下げ、測量実施。
- 4月12日(月)曇 III区の遺構掘り下げ、測量実施。
- 4月15日(木)晴 現場の片つけ作業及び測量実施。

以降、報告書作成に向け整理作業を行なう。

## 第2章 遺跡の環境

### 1) 遺跡の位置と環境

最中上遺跡は木曾川の支流、西小川の北岸の小さな尾根上に位置する。この西小川の北岸の山から続く小さな尾根上の平坦部は、日当たりがよく、多くの道路が点在しており、最中上遺跡もその一つである。今回の調査地はこの尾根の平坦部の先端近くから、西側を奥に向けて通るようになっており、I区は尾根の西側の平坦部の端部、II・III区は尾根先端の平坦部のほぼ中央に当たる。

この西小川の谷の奥には著名な赤沢自然休養林がある。昭和40年代ころまでは対岸に森林鉄道があり、木材の輸送に使われていた。今回改良工事を行った県道はそこに向かっての観光道路や、国有林で伐採された木材の搬出道路として利用されている。近年では交通量が増加し、作られた時期が古く狭い県道では支障が生じているため改良工事が行われている。

遺跡の基盤は木曾谷の南部に普遍的に見られるカコウ岩層で、その上に御嶽によるローム層が堆積し、さらに黒色土が堆積している。尾根が狭く、降雨などによる土砂の移動がくり返されていることや、後世の耕作等の際の削平等が著しいため、漸移層の良好に遺存している部分は少なく、耕作土を除去するとすぐに基盤層が露出している部分が多い。I区付近は北側の谷から多量のカコウ岩の礫が押し出されてきているため、耕作時に出た石を用いて多数の石垣が築かれている。今回調査を行った西側の部分では、この谷に向かっての落ち込みが始まっている。

またこの谷の周辺からは水晶の産出が知られており、今回の調査でも良好な素材を利用した石器が少數のほか、多量の原材料や水晶を含んだ自然礫が出土している。

### 2) 最中上遺跡の周辺を巡る研究史

最中上遺跡に近接する最中遺跡は、上松町の遺跡の中では古くからその存在が知られていたものの一つである。遺跡の中心として知られていたのは、今回の調査地から一段下の小川に面した畠となっている部分である。昭和30年代には樋口昇一氏らにより小規模な発掘調査が行われ、縄文時代後期から晩期の遺物の出土が報告されている。このときの出土遺物は旧上松町民俗資料館を経て、現在上松町教育委員会で保管している。

昭和50年代には当時上松中学校に在職された神村透氏の指導のもとに考古学クラブの生徒たちが町内の遺跡を踏査している。このときには新しい遺跡がいくつか確認され、表面採集によって各遺跡の内容が明らかにされている。最中上遺跡はこのときに発見され、縄文時代早期・中期の遺跡として知られている。

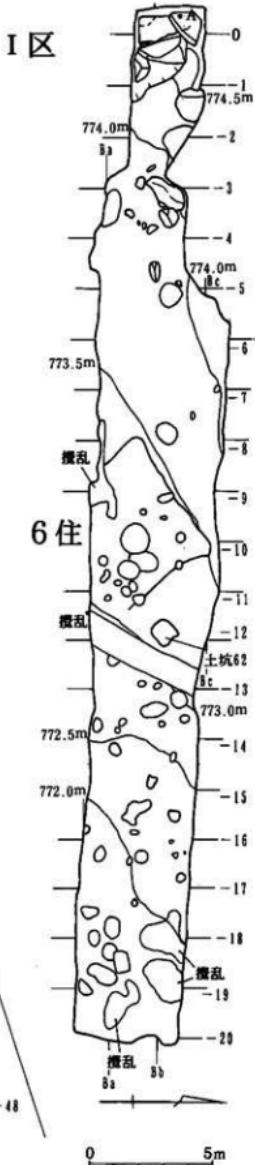
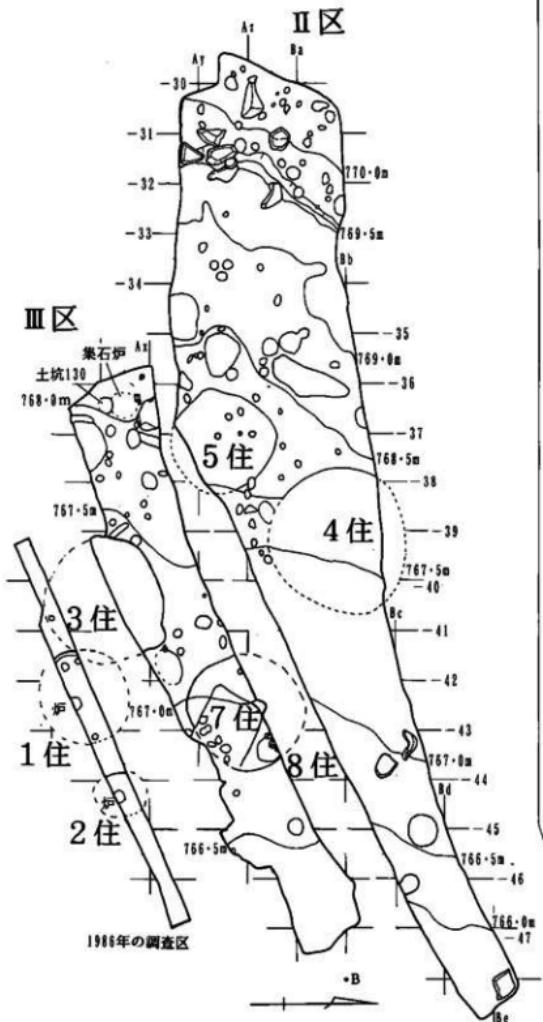
この時の踏査などの記録については、考古学クラブで小冊子にまとめている。また生徒の一人であった野村一寿氏は高校生になってからこのときの採集資料についてまとめている。

昭和61年には最中上遺跡で県道の拡幅工事の際に縄文時代中期後葉の住居址3軒が確認され、山下生六氏を担当とした発掘調査が行われている。概要が手書きコピーの報告にまとめられているが、正式な報告書は刊行されていない。このときの出土遺物については、本書の中で合わせて報告を行っている。

- 文献 上松中学校考古学クラブ1975 「上松町の遺跡と遺物」1  
上松中学校考古学クラブ1978 「上松町の遺跡と遺物」2  
野村一寿 1980 「木曾の原始時代」木曾西高校自主研究授業レポート

基準点標高 国家座標標高系

基準点1 I区西端のA点より北へ10m  
 $X = -25333.283\text{m}$ ・ $Y = -75100.774\text{m}$   
 基準点2 III区の東側のB点より東へ13m  
 $X = -25384.141\text{m}$ ・ $Y = -74999.646\text{m}$



第3図 最中上遺跡全体図 (1/200)

## 第3章 調査の結果

### 1) 調査の方法

試掘により遺跡の存在が確認された部分に調査区を設定し、現在の道路に沿って谷の奥側よりI区・II区としたが、掘削時の隣接する道路や水田部分の安全確保のため、一部は事業予定地の全域を調査区とすることができなかった。

また前述の経過によりI・II区の調査終了後にII区の隣接部分の調査を行うことになった。その際II区を埋め戻した仮設道路の幅による制約と、掘削時の安全確保のため、II区に連続した調査区の設定ができなかつたため、新たに調査する部分をIII区とした。

調査は重機により表土を除去した後、人力による遺構検出、掘り下げを行った。測量は徳ジャスティクに委託して基準点の設定および写真実測を行い、一部は手書きによる測量を併用した。基準点の座標については、全体図の中に示した。III区についてはすべて手書きによる測量を行った。

調査面積はI区142m<sup>2</sup>、II区170m<sup>2</sup>、III区78m<sup>2</sup>、合計390m<sup>2</sup>である。

### 2) 調査の概要

第1次調査ではI・II区で縄文時代中期後葉の住居址2・平安時代の住居址1、縄文時代早期～中世の土坑108を検出した。

第2次調査ではIII区で縄文時代中期後葉の住居址3・平安時代の住居址1・縄文時代早期～中世の土坑50を検出した。このうち1軒は昭和61年度に道路拡幅工事の際、確認・調査された住居址の続きの部分に当たると推定されるが、昭和61年の調査位置と、今回の調査位置を厳密に整合させることができないため、両者の検出遺構の関連は確実でない部分がある。

昭和61年の調査で検出された遺構については、全体図の中に合わせて収録しているが、遺構についての記載は紙幅の制約により割愛した。道路拡幅時の幅2m弱の限られた範囲の調査であり、遺構の認定や隸属遺物については明確でない部分がある。今回の整理の中でも出土遺物の再検討を行ったが、さまざまな時期の遺物が混在しており、遺構の時期を明確にすることはできなかった。遺物については、昭和61年に出土したものも後章でまとめて報告している。

なお遺構番号については、昭和61年の調査で炉の周辺が検出された第1号・第2号の2軒の住居址の番号はそのままとし、埋甕が単独で検出されたものを第3号住居址とした。今回のI・II区では住居址は検出順に4号から番号を付けた。III区で検出された住居址については、昭和61年の調査の図と照合して、単独で検出された埋甕と一連のものと推定される住居址を第3号住居址とし、以下はI・II区と同様にした。

報告に当たっては、各遺構とそこから出土した土器に関する記述を遺構ごとに行い、石器については後の項にまとめている。

年代観については、以下の文献による。

縄文時代中期中葉 下総考古学研究会 1985 「下総考古学」8号  
同 中期後葉 長野県史刊行会 1988 「長野県史」考古資料編

### 3) 縄文時代の遺構

#### 1 第3号住居址（第4図）

III区の中央部で検出された。南西部で縄文時代早期の土坑150を切っている。昭和61年の調査の際、埋甕が単独で検出された住居址の本体部分である。南西の未調査部分で昭和61年度に調査された第1号住居址と重複していると推定されるが、第2号住居址に属する遺物の時期がはっきりしないため、前後関係は不明である。

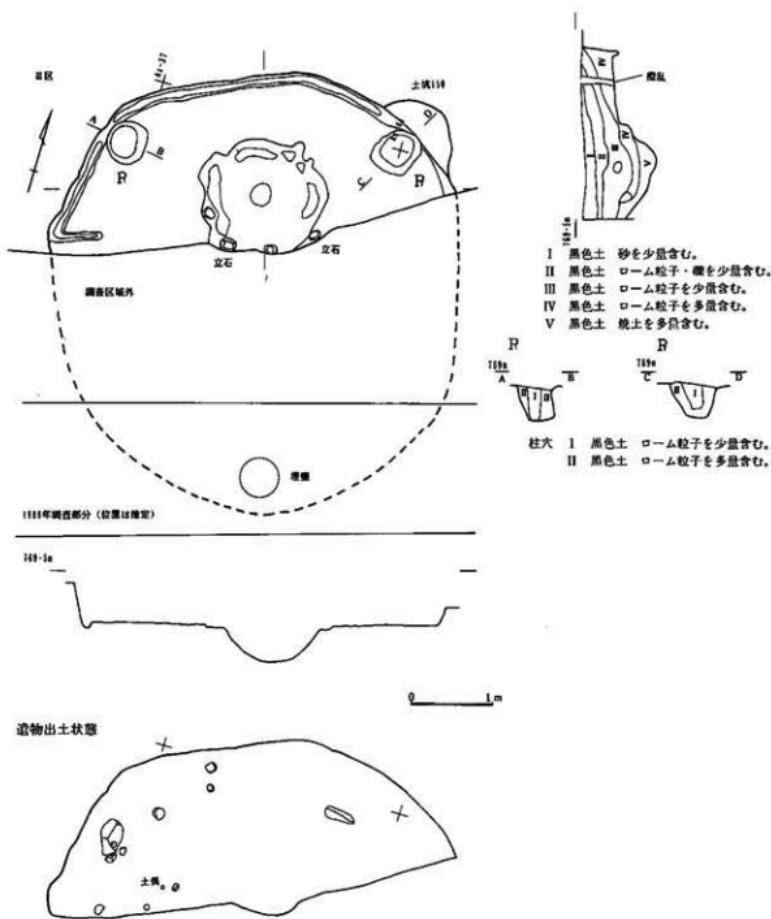
今回は住居址の奥側のはば半分を調査した。調査区の南側の部分は、安全確保のため調査できなかったが、調査部分から30cmほどで、昭和61年の調査後の擁壁施工部分に接続する。昭和61年の調査部分とは、約2m離れているが、当時の調査記録等から推定すると、この間の未調査部分は床面以下まで削平されていることが予想される。図上では奥壁側の柱穴と壁の方向、それに炉の位置から住居の主軸線を推定し、その線上に昭和61年に検出された埋甕があるものとして復元している。

住居の入口は南側で、不整円形と推定される。奥行は約4.5m、幅は約5m、主軸はN-30°-Wとなる。入口側は埋甕が単独で検出された以外は削平されており、柱穴などは検出されていない。今回調査を行った部分は、遺構の掘り込みが深く、残存状況は良好である。床は地山のロームを固めており、平坦で非常に固くなっている。西及び北の壁側には溝溝が巡っている。奥壁側の柱穴は2基検出された。いずれも断面に柱痕が明瞭に認められた。

炉は石圓い炉と推定されるが、廃絶時に石を抜かれている。石を抜いた痕跡は明瞭に残っており、抜かれた石材の一部と思われるものが、炉内から出土している。入口側の両端の石材は立石状に立てられていた。検出後調査区の端が崩落したため写真撮影等は行えず、図に位置を示すことにどまつた。中央部の掘り込みはしっかりといて、中はよく焼けている。

埋甕（第9図1）は唐草文系の土器を正位で埋設している。口縁の一部をわずかに欠くが、他はほぼ完全に残っており、底部も破壊されていない。上半のループの部分は6単位、胴部下半では4単位の隆帯で区画した中を綾杉状の沈線で埋め、上半のループの間には波状の沈線を入れている。胴部の表面には炭化物の付着が著しい。遺物は覆土中より多量の土器片が出土しているが、接合して器形が復元できたものは少ない。（第10図2～4・拓影第13図1～26）唐草文系の土器が主体で下伊那系・東海系の土器が少数存在する。第11図2は小型の深鉢で、4分の1弱が遺存している。口縁と頸部に2条の沈線を巡らせ、その間を沈線で埋めている。胎土は明褐色で、雲母の細粒を含んでいる。3は小型の台付きの深鉢の脚部で、4単位で1周するものと思われる。4は深鉢で胴部と底部の一部が遺存する。上部の折損部は接合部で剥落しており、ここから外側に並がって行くものと思われる。上部には2本の沈線があるが、文様の展開や単位数などは破片が小さいため不明である。3・4ともに胎土は黄身がかった明灰色で砂の細粒を多く含んでいる。

拓影で示したものは、全て唐草文系の深鉢の破片である。大部分は胎土が明褐色で雲母の細粒を含んでいる。第13図5・21・26の3点は胎土が黄身がかった灰色で、他と異なっている。1・2・4は口縁が開き、その直下でくびれる。4は先端の鋭利な工具で沈線を施していて、他とは印象が異なる。3は胴の上部が大きく内傾している。6～10は肩部の破片である。6は頂部に刻みの入った低い隆帯の上側に、太い工具による浅い交差刺突が施される。この土器の文様はごく浅い沈線で描かれている。11～25は胴部の破片である。いずれも隆帯による区画内を沈線で充填している。20は棒状の工具による沈線で埋めたあとに、波状の沈線を描いている。21～23は細い棒状の沈線による地文の上に沈線で文様を描いている。24は他より細い工具で施文している。25は大型の土器の胴部である。屈曲した部分に交差刺突文を巡らせ、その下に横方向の綾杉状の沈線が入っている。破片の下端



第4図 第3号住居址 (1/60)

部には隆帯の一部が残っており、区画した中を綾状の沈線で埋めたものと思われるが、文様の単位や展開は不明である。26は肩部の外側の把手の基部が付いていた部分と思われる破片である。拓影の中央から左にかけての部分が大きく剥落している。

石器は覆土中より石錐7点、石錐1点、打製石斧2点、スクレーパー類20点・すり石類15点など細片まで合わせて186点出土している。そのうちの63点は黒曜石の碎片で、まとまって出土している。

本址は出土遺物より縄文時代中期後葉III期に位置付けられる。

## 2 第4号住居址（第5図）

II区の中央部北側で検出された。東側の大半を水田造成時に削平され、北側の一部は調査区外に延びている。削平された部分は床面以下まで削られているが、柱穴が遺存しており、プランを復元することができた。入口は南側で、不整円形と推定される。奥行は約5m、幅は約6mと推定される。主軸はN-30°-Eとなる。覆土には多量のカコウ岩の礫が含まれていた。

壁は西側のみ遺存しているが、しっかりと掘り込まれている。床は地山のロームを固めており、一部には貼り床が認められた。平坦で非常に固くしまっている。奥壁側には周溝が巡っている。柱穴は壁に沿って巡っている。主軸線をはさんで対称に配置しないものがあるため、建て替えなどの可能性がある。炉は水田造成時に破壊されているが、石囲い炉と推定される。中央部の掘り込みはしっかりしていて、中はよく焼けている。

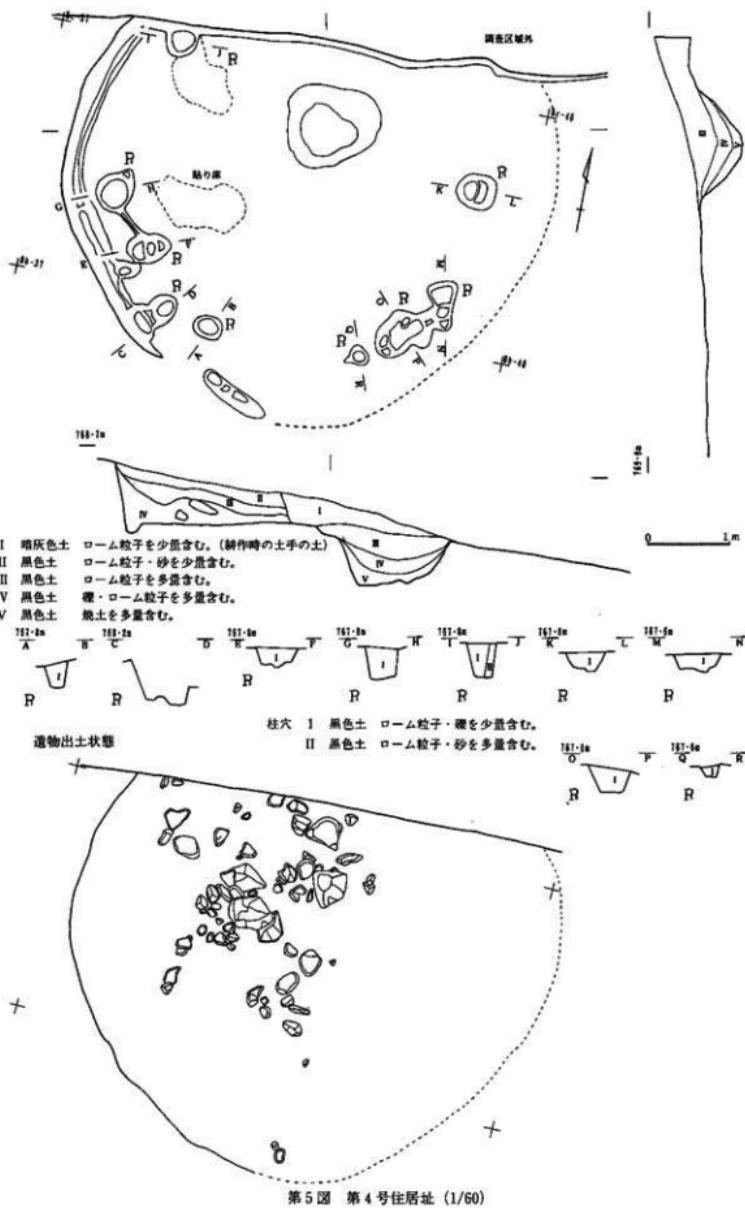
遺物は覆土中より多量の土器片が出土しているが、接合して器形が復元できたものは少ない。唐草文系の土器が主体で下伊那系・東海系の土器が少数存在する。（第10図5～8・拓影第14図27～49）

第10図5は深鉢の口縁に付く把手である。口縁に続く台形の板状の突起の頂部と口縁の下を柱でつなぎ、その外側に沈線・刺突などで文様を入れている。6・7は小型の台付きの土器の脚部である。6は脚部に2本の縦の隆帯を付けている。破片が小さいため、単位などは不明である。8は小型の台付きの鉢になると思われる。2分の1弱が遺存している。口縁部は図の正面の2本の把手が付くものが2単位、両側の1本のものが2単位付くと思われる。正面の把手の上面には、渦巻き状の沈線があり、側面はどちらのものも連続刺突が施されている。胴部は低い隆帯による区画内を沈線で埋めている。沈線の一部には先端が鋭利な工具が用いられており、伊那谷南部の土器に類似が散見される。

拓影で示したものは、全て唐草文系の深鉢の破片である。大部分の胎土は明褐色で雲母の細粒を大量に含んでいるが、第14図28は胎土が暗灰色で白色の粒子を大量に含んでおり、他とは異なっている。30は口縁の直下に隆帯を巡らせ、その上下に刺突を施している。唐草文系の土器にみられる口縁部内側の突帯も幅広で低く、やや特異な土器である。34は肩部に2本の沈線を巡らせ、その下には細かい縦文が施される。36～48は胴部の破片である。37・46の2点は文様の沈線が深いが、他は非常に浅い。47は口縁が大きく開く器形になると思われる。破片上部の屈曲部に浅い沈線を巡らせて渦巻を描き、そこから沈線を垂下させている。地文の縦文は非常に粗雑である。屈曲部の下は沈線の中に刺突を入れている。48は非常に細い工具による粗雑な浅い沈線の地文の上に沈線で文様を描いている。49は胴部の破片を転用した土製円盤である。土器の胴部のカーブが残って大きく反っており、外縁の一部がわずかに使用されている。他に東海地方の呪文式土器の深鉢の破片が数点出土しているが、図示できなかった。

石器は覆土より石錐8点、打製石斧1点、スクレーパー類11点・すり石類18点など細片も含めて304点が出土している。黒曜石・チャート・安山岩の碎片が多く、184点が出土している。

本址は出土遺物より縄文時代中期後葉III期に位置付けられる。



### 3 第5号住居址（第6図）

II区の中央部南側で検出された。東側の一部を水田造成時に削平され、南側の一部は調査区外に延びている。入口は南側で、この部分の壁がやや突出した五角形のプランと推定される。奥行は約4m、幅は約4m、主軸はN-50°-Eとなる。覆土には少量の炭とカコウ岩の礫が含まれていた。壁は西側のみ残存しているが、掘り込みは深く、非常にしっかりしている。床は地山のロームを固めており、平坦で固くしまっている。奥壁側には周溝が巡っている。北側は一部を開田時に削平されているが、遺存状態は良好である。柱穴は壁に沿って巡っている。柱穴は南東の一部が調査区外のため未検出であるが、6本の主柱穴が主軸をはさんで対象に壁に沿って巡るものと思われる。入口側には埋甕のやや奥に入口部の構造物と思われる2本の細い柱がある。

炉は石囲い炉であったと推定される。廃絶時に炉石はすべて抜かれているが、痕跡を観察することができた。内部はよく焼けている。

埋甕は唐草文系の土器をやや斜めに正位で埋設している。掘り方は土器の大きさとほとんど変わらない。土器（第9図9）は口縁の一部を欠くが、底部は破壊されておらず完存している。底部には編み物と思われる圧痕があるが、摩滅のため不明瞭である。口縁の下に2条の隆帯を入れ、中に2段の交互刺突を巡らせている。胴部は4単位の隆帯で区画した中を櫛状の工具による条線で埋め、沈線で文様を描いている。口縁部の隆帯の下には横方向の綾杉文が一段巡らされている。この文様の下には隆帯などではなく、特異な土器である。

遺物は覆土中より少量の土器片が出土している。本址に伴うもののほか、縄文時代早期の土器片が少數出土している。本址に伴う土器は唐草文系の土器が主体で下伊那系の土器が少数存在する。接合して器形が復元できたものは少ないが深鉢の破片が数個体分ある。（第10図10～第11図15）

10は口縁に2単位の把手が付く。口縁の下に8単位で1周すると思われる半円状の隆帯を巡らせ、中に沈線を櫛状に入れている。隆帯は大部分が剥落しているが、痕跡が明瞭に残っている。把手の側面には連続した押し引きが施されている。胎土は黄身がかった明灰色で砂を多く含む。11・14は炉の中から出土した。11は口縁のすぐ下と思われる隆帯の区画内を交互刺突と沈線で埋めている。図の右と左の文様が交互に配されるものと思われるが、小破片のため展開は不明である。12は床面直上に伏せられた状態で出土した。13は口縁から胴部の一部が残存している。15は本址の覆土のほか、第4号住居址からも同一個体の破片が出土している。復元実測できなかつたため、拓影と断面の復元図で示した。隆帯で区画した器面を縦の沈線で埋め、沈線とその間の交互刺突で文様を描いている。頸部が細長く、その下で肩が口径近くまで張る深鉢である。胎土はやや黄身がかった明灰色で、砂と雲母の細粒を含んでいる。唐草文系の土器の中では特異なものである。土器の小破片は他時期のものなどが多く、拓影で示したものはない。

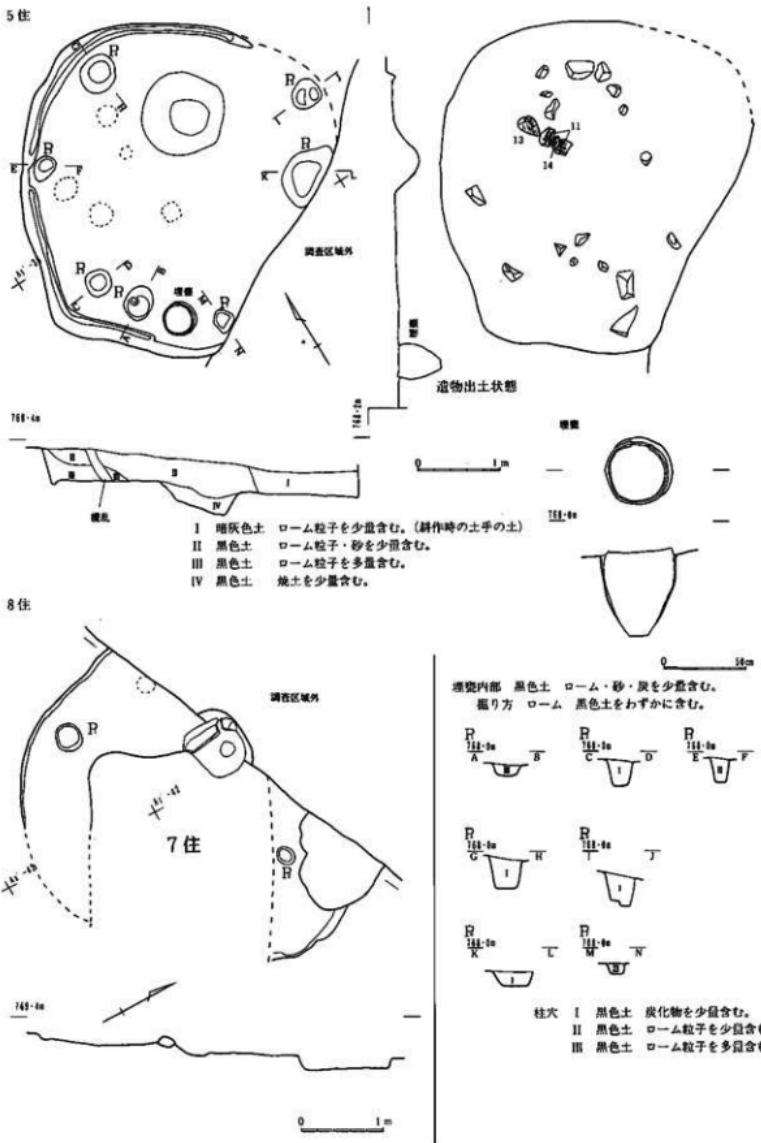
石器は覆土中より石錐6点、石匙・打製石斧各1点、すり石7点など碎片まで含めて146点が出土している。黒曜石の碎片が37点あり、他の住居址と同様にまとまって出土している。

本址は出土遺物より縄文時代中期後葉期に位置付けられる。

### 4 第8号住居址（第6図）

III区の中央部北側で検出された。入口側の約半分を調査したが、大半を削平され、入口側の大部分を第7号住居址に切られている。北側の約半分は調査区外に延びている。

入口は南側で、不整円形と推定される。奥行は約5m、幅は約6mと推定される。主軸はN-60°-Eとなる。壁は東及び西側の一部のみ残存しているが、状態はよくない。床は地山のロームを固めている。搅乱等のため一部が残存するのみである。柱穴は壁に沿って巡っている物と思われるが、搅乱等のためはっきりしない。



第6図 第5号・8号住居址実測図(1/60)

炉は第7号住居址に大半を破壊され、西側の石を残すのみである。中央部はよく焼けている。

遺物は覆土中より少量の土器片が出土しているが、小片のため接合して器形が復元できたものではなく、明確な時期決定ができるものもない。

石器は覆土中から石礫3点、スクレーパー1点、磨石3点など碎片を含めて計47点が出土している。このうち碎片は30点あり、黒曜石とチャートが大半を占める。

本址は、明確に時期決定できる遺物がないが、縄文時代中期後葉のものと推定される。

## 5 集石炉（第7図）

III区の西端で検出された。上層に縄文時代中期後葉の土坑130があり、その10cmほど下で検出された。直径約1.2mの不整円形で、下層の掘り込みの深さは約40cmの浅いすり鉢状になっている。拳大の礫を集めており、礫の間の褐色土中には少量の炭化物が混入していた。礫の中で明確な披熱が認められたものは少ない。

上面からは押型文土器が数片出土しており、本址もその時期のものと推定される。

## 6 土 坑

今回の調査では160基検出された。覆土中の遺物から縄文時代早期から中世の各時代に渡るものと推定されるが、明確な時期を決定できたものはほとんどない。各時代の遺物が混在するものも多く、今回は時代別の分布などの考察は行っていない。全体図では位置を提示するに止め、遺構番号については実測図を掲載した遺物があるもの以外は示していない。単独で図示したのは釣手土器の出土した土坑62と、器形が復元できる土器が出土した土坑150の2基のみである。

### 土坑62（第8図）

I区の中央部、第6号住居址の東側に位置する。直径約90cmの円形で上部はやや角張っている。深さは約60cmである。覆土から釣手土器のか、数片の土器片（第18図213～216）が出土している。

釣手土器（第12図19）は本体のテラス部の8分の1弱が残っている。土坑の底から約10cm上で、上下逆さの状態で出土した。図の右側がわずかに上に向かって反り始めしており、把手に向かって立ち上がる基部の部分と推定される。テラスの上部は8単位に区画され、沈線文が施される。内面は横方向にいねいにナデ調整されている。釣手土器としては大型のものである。

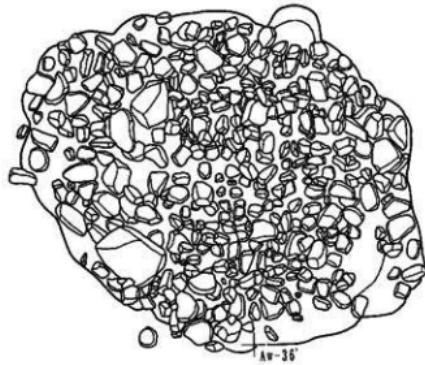
本址の時期は出土した土器より、縄文時代中期後葉II～III期と推定されるが、共伴した土器片がいずれも小片のため、明確にできない。

### 土坑150（第8図）

III区の西端に位置する。本址の下層から集石炉が検出されている。黒色土の中に掘り込まれているため、確認が困難で、表土剥ぎの際に南西部が削平されている。直径約50cmほどの不整楕円形で、断面はタライ状になっている。底に近い部分から深鉢の破片が、内面を上にして敷かれたような状態で出土している。覆土中から少量の炭化物が出土しているが、焼土などは確認されていない。

土器（第11図18）は口縁から体部の3分の1強が残存している。口縁からわずかにくびれる頸部にかけての文様帯には半截竹管状の工具による平行沈線を巡らせ、その中に同じ工具の先端で連続した刻みを入れており、この部分は隆起化していない。頸部付近には同様の工具による沈線が描かれ、沈線に沿って棒状の工具の先端によ

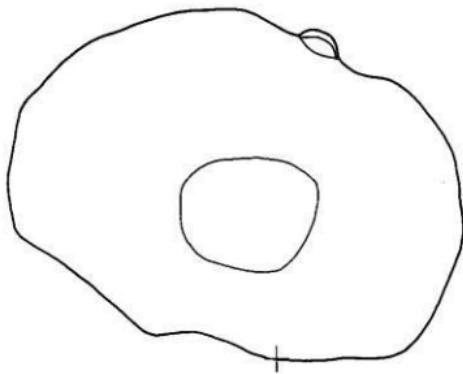
平面



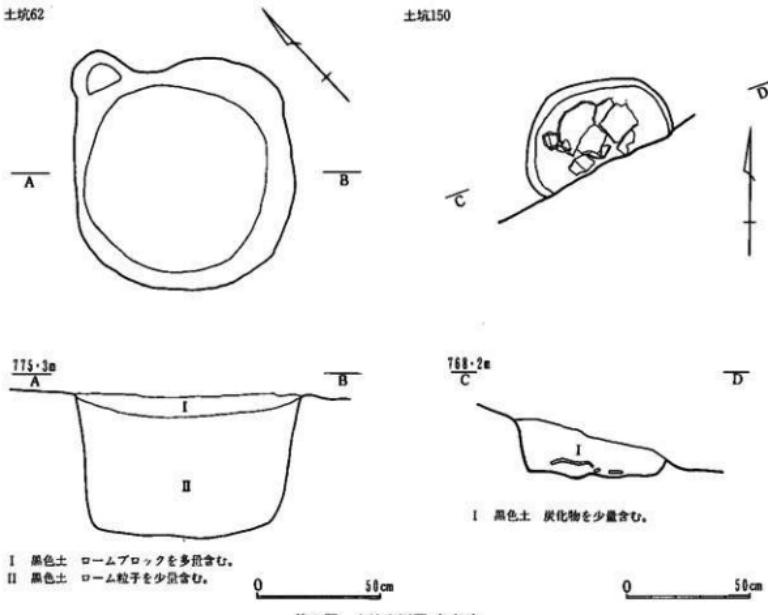
- I 褐色土 磨を多量含む。
- II 褐色土 磨を多量・炭を少量含む。  
Iより磨が大きい。
- III 褐色土 ロームを少量含む。

完掘状態

0 50cm



第7図 集石炉 (1/20)



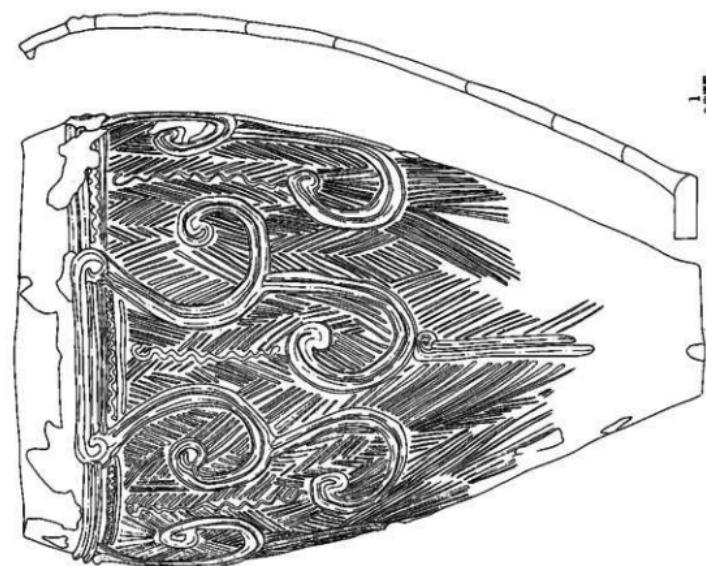
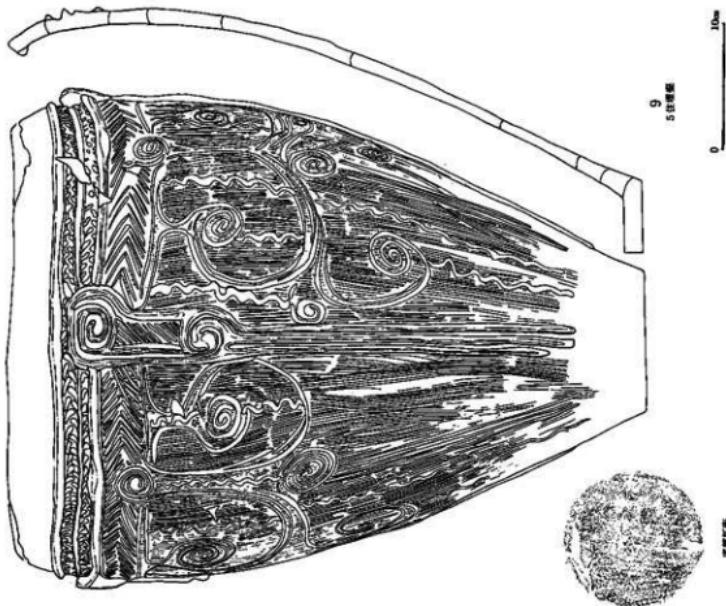
第8図 土坑実測図 (1/20)

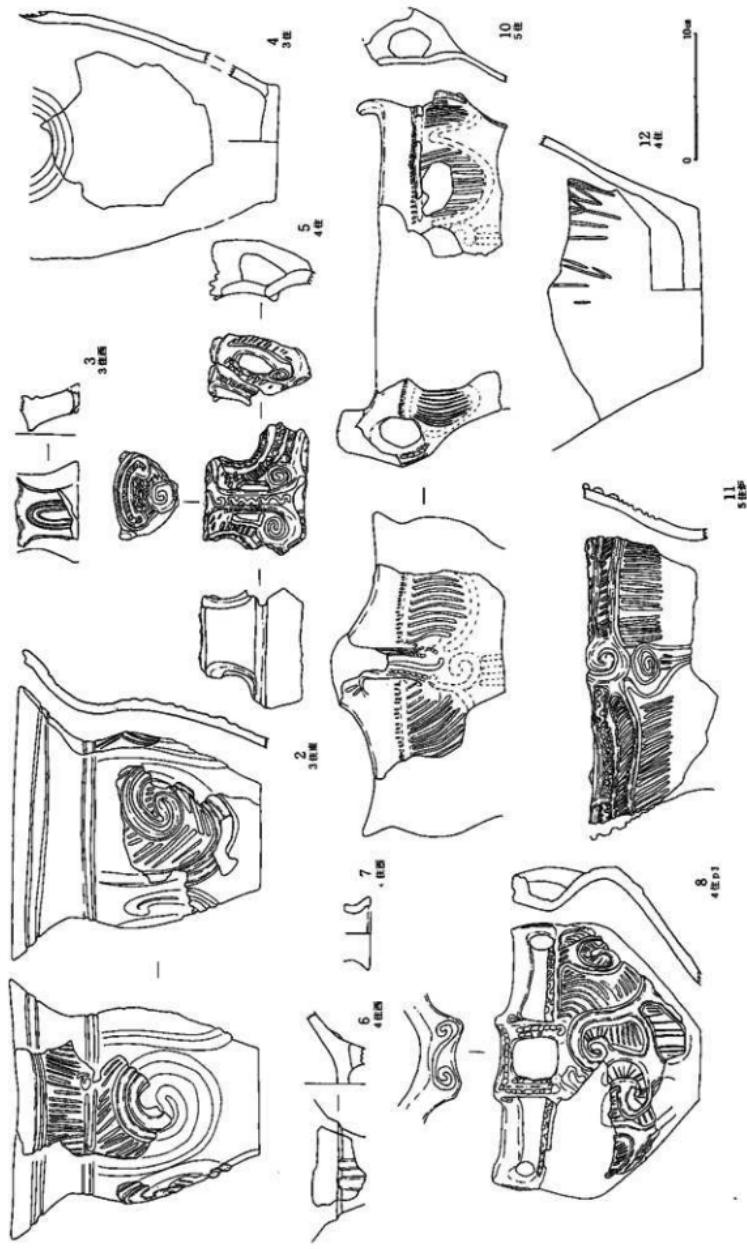
る、爪状の連続した刺突が施されている。この刺突の技法は、中部高地や北陸のものとは異なっており、浅い平行沈線や連続した刺みとの組合せは、東海地方の影響によるものかもしれない。しかし現在のところ東海地方の資料の中に、この土器とよく似たものはない。胴部には口縁部の文様帯と同様の工具による縦位の区画文が描かれる。この区画文は「O」または「U」状のものがいくつも集まっており、上下のつながりがなくなつて閉じている。浅い平行沈線である点が異なるが、中部高地的な技法である。口縁部の下からは「く」の字を反転させた隆帯が付けられ、その頂部には刺みが施される。隆帯の先端は胴部の中央付近の円形の貼り付けに接続している。隆帯は残存する破片では図示したもののはかに、別のものの破片が出土しているが、何単位あったのかは不明である。この貼り付けは北陸から北信地方の、新崎II式土器に併行する時期の土器にまれに見られるものである。胎土は明褐色で砂を少量含む。胴部の表面には炭化物の付着が見られる。

この土器の時期は文様等から中期中葉の勝坂I～II式期のものと思われ、胴部の文様を見ると、II式期のものと考えてよいかもしれない。明確な時期や系譜等については、今後資料の増加を待つて検討したい。

(この土器については寺内隆夫氏よりコメントをいただき、それを元に記述した。誤認や曲解については筆者の責によるものである。)

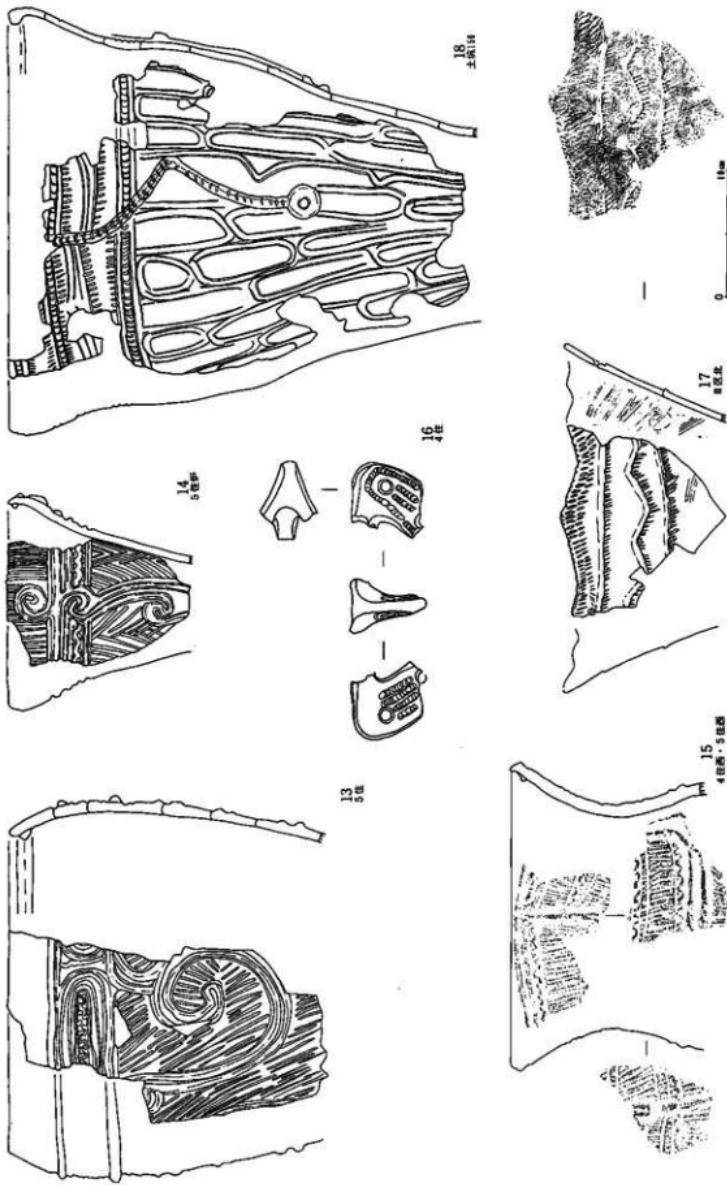
第9圖 土器実測図(1) (1/4)

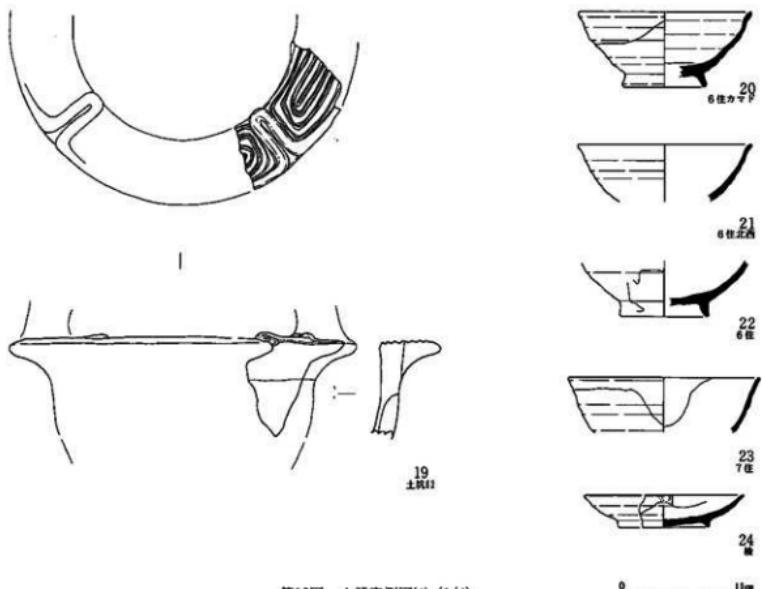




第10圖 土器共測圖(2) (1/4)

第11图 土器类图(3) (1/4)





第12図 土器実測図(4) (1/4)

#### 4) 繩文時代の土器

今回の調査では、造構が多数検出された縄文時代中期後半のもののほか、早期から晩期までのさまざまな時期の土器が出土している。調査区の制約により、完掘できなかった造構も多く、復元して図示できたものは少ない。

またさまざまな時期の造構が混在していることから、土坑などの出土遺物は各時期の遺物が混在していて、時期を決定できないもののが多かった。このため住居址の遺物については、住居址に伴うと思われるものをまとめて図示し、各居住の項の中でふれている。明らかに時期が異なると思われるものは造構外のものと一括とした。土坑の遺物については、同一時期のものが比較的良好にまとまって出土したものも若干あるが、独立したまとまりは作らず、造構外のものとともに図示している。図中の出土位置のうち「検」は造構検出時に出土したものである。

造構外の遺物については時期別にまとめて図示しているが、資料の絶対数が少いなどの制約のため、類別による繁雑化を避け、文様等によってわけて記述するにとどめた。

土器の年代観については『長野県史』考古資料編の年代観（長野県史刊行会1988）によった。

##### 1 早期前半の土器（拓影第15図50～95）

II区・III区より押型文土器と燃糸文土器が出土している。固化できない小破片12点を除き、拓影で示した。器形の復元できるものはなく、III区の集石炉土坑にともなったもの以外は、ほとんどが造構外からの出土である。調査区の制約により明確でないが、集石炉が検出されたIII区の西側よりややまとまって出土した以外は、顕著な集中は認められない。

50～53は口縁付近に横方向の大型の山形文が施され、その下に斜格子目文を巡らせている。50は口唇に斜めの刻みが施される。口縁部の山形文は、土器を上から見たときに時計回りの方向で施され、拓影の左下では施文時の原体の回転のはじめと終わりが重なっている。いずれもやや黄身がかった灰色の胎土で、長石の白色微粒子が多く含まれている。54・55は大型の山形文を縱に転がしている。54の口唇部には刻みがはいっている。56は口縁下の屈曲部より上に方形の市松文を縱につけ、その下に大型の山形文を縱につけている。施文の順序は、市松文のあとに山形文を施している。57・58は同一個体と思われる。頸部の縱方向に施された市松文の下に、棒状の工具によるものと思われる斜めの沈線が施される。表面は明るい黄土色で石英の細粒を多く含んでいる。59は口唇部に山形文が施される。口縁部の文様は粗大な山形文を横方向に施している。60～63は棒状工具の先端による半月状の刺突が施される。60は刺突の下に横方向の山形文、さらに下には縱の細長い楕円状のネガティブ文が施される。胎土は暗灰色で、長石の白色微粒子を多く含み、内外の表面のみ明るい灰色になっている。61・62は刺突の上に方形の横に細長い市松文が施される。胎土の色調は61が明褐色、62が暗灰色と異なるが、ともに長石の白色微粒子が多く含まれる。63は他の3点より刺突が非常に小さい。拓影の下半部には長方形のネガティブ文が縱に施される。64は楕円形の刺突が施される。胎土は60・62と良く似ている。65は口唇部に斜めの刻みが入る。口縁部には格子目文が施される。図示できなかった小破片には、同様の文様で、口唇に山形文が施されたものが1点ある。66は拓影の上端部には山形文が横方向に施され、その下には縱長の山形文が横方向に施されている。下端部には方形の横長のネガティブ文が施される。67は上部は横方向の山形文、下部は長方形のネガティブ文が施される。この2点の胎土は、50～53と良く似ている。68は横方向のネガティブ楕円文が施されている。拓影の上部側の内側がややふくらんでいて、摩滅が著しくはっきりしないが、口縁部の可能性もある。69～84は胴部下半から底部の破片である。いずれも縱及び斜め方向の、長方形または長楕円形のネガティブ文が施される。胎土の色調は異なっているが、いずれも長石の白色微粒子を多量に含んでいる。74は粒の大きい撫糸文の可能性がある。84は長方形のネガティブ文が横方向に施される。85は細かい格子目文が施されている。86は縱方向の山形文が施され、端部が重複して菱形状になっている。87は斜格子状文の破片である。いずれも底部に近い部分の破片である。88はやや大きめの市松文が施されている。89は比較的大きい横方向の楕円文が施される。胎土は明褐色で石英の微粒子を多く含み、他の押型文土器とは異なっている。この2点は立野式土器に見られる特徴を持つものである。

90～95は撫糸文土器である。押型文土器と同様にII・III区より出土している。他に図示できなかった小破片が数点出土している。いずれも破片が小さいために、文様構成等は不明である。90・91は同一個体と思われる。他に同一個体と思われる細片が數片出土しているが、図化できなかった。口唇部は丸みを帯び、左撫糸(L)の撫糸を密に施している。93は胴部の下半と思われる。横方向に密接施文され、内面は指頭による凹凸が著しい。94は口縁部に近い破片で表裏に撫糸文が施されている。95は他に比べて文様の粒が粗い。

今回出土した押型文土器は、數種類の異なる文様が組み合わされる構成のものがあることや、胎土に石英や長石の粉末が多く含まれたものがあることなどから、愛知県丹羽郡大口町北替地遺跡、同東加茂郡足助町馬場遺跡・岐阜県中津川市落合五郎遺跡などの資料と良く似ている。押型文土器の中でも前半期の段階の、近畿から東海地方にみられるもので、木曾谷では日義村稻荷沢遺跡で數片出土している。山田猛氏は北替地・馬場遺跡の土器を近畿地方の大川b式に併行する段階に位置付け、長野県の立野式土器との関連では、立野式に先行する段階のものとしている。今回の最中上遺跡では立野式土器の特徴を持った破片が出土しているが、わずか2点であり、主体となっている土器群との共伴関係などは不明である。

また近年の関西地方での研究成果等によれば、今回出土した土器群は数段階に分類できる可能性もある。これについては今後さらに検討して行きたいと思う。

この時期の押型文土器は、近年近畿地方での資料が充実し、内容が明らかになりつつある。中部高地の土器との関連については、いくつかの研究が行われているが未解明の点が少なくない。今回出土した土器はそうした中で、今後注目されるものである。

(早期前半の土器については神村透氏に多くのご教示をいただき、原稿を見ていただいた。誤認や曲解については筆者の責によるものである。)

## 2 早期後半～前期初頭の土器 (実測図第11図17・拓影第15図96～第17図195)

調査区の全域より出土している。総量は拓影で図示したもののおよそ3倍になる。土坑にともなったものが若干あるが、ほとんどは遺構外からの出土である。長野県でこの時期によく見られる厚手の縄文を施した尖底土器は数片のみで、東海系の土器がほとんどを占める。胎土の分析等を行えなかったが、肉眼による観察では数種類の胎土が認められる。本稿では形式名は東海地方のものを用いたが、直接の搬入品以外に、在地での模倣品などが存在するものと思われる。

器形が復元できるものはほとんどなく、比較的大きく、文様等がはっきりした破片を中心に図示した。時期的には数段階に渡っているものと思われるが、層位的にとらえられたものや、顕著なまとまりを示すものはない。今回は十分な分析を行えなかったので、文様の類似したものごとに図示している。

96～103は口縁下部に幅広の隆帯を貼り付け、頂部を指頭でくぼませている。口唇部には棒状の工具で連続した刻みが入れられている。96は3段(以上)の隆帯を巡らせている。他に同一個体と思われる破片が数点出土している。拓影の右下には両側から補修孔をあけている。胎土は明褐色で、砂の細粒を少量含む。102・103は他よりやや隆帯が細い。これらは東海地方の上ノ山式土器に対比できる。

104～113・117は前の一群より、やや幅が狭く、断面が台形に近い隆帯を巡らせている。隆帯頂部には工具を使用した刻みが入れられている。いずれも胎土には白色の細粒が多く含まれている。104の補修孔は表面からあけられている。口唇部の刻みは106・107は外側のみ、105・108～110・113は口唇の頂部を挟んで表裏に交互に入れられている。106・108の内面には条痕がみられる。この一群は入海I式土器に対比できる。

第11図17の土器は今回出土した早期の土器の中で、唯一器形の一部を復元できたものである。II区の北端部の水田の直下より出土したため、鉄分の付着が著しく、胎土の観察等を十分に行えなかった。口縁は8単位以上の突起をもつ波状になり、口唇には工具による刻みが入る。口縁の下には2段の工具による爪状の連続刺突が巡らされ、その下には3段の小さな段を作り、その部分にも連続刺突が施されている。段の上の部分は横方向になでられている。内面は斜めの条痕が入っており、指頭による凹凸が著しい。胎土は明褐色で、纖維を少量含む。東海地方の入海II式土器で搬入品と思われる。

114～121は低い隆帯と、先端の鋭い工具による刺突を特徴とする。口唇部の刻みは、116のみ表裏に交互に入れられている。118の拓影下部の隆帯の上には貝殻の側面圧痕状の痕跡が見られるが、摩滅のためははっきりしない。

122は口縁の下が小さな段になり、その上に工具による連続した刻みが入る。口唇部の遺存状態はよくないが、刻みがわずかに認められる。胎土には多量の纖維が含まれている。他の土器とは異なっており、系統等は不明である。

123～129は工具による爪型の連続刺突が施されている。胎土や施文具などによりいくつかに分けることができる。123・124は胎土に纖維が含まれ、内面には条痕が認められる。130も内面が摩滅しているが、これとよく似て

いる。125～127は胎土に纖維のほか石英の粗粒が含まれる。129・131・136は胎土が他に比べて非常に細かく、緻密である。132・139は他より大型の工具を使用している。133・134・136の口唇部の割みは一方向から施されている。135の口唇部は鋸状になっているが、交互刺突によるものか、工具先端の形状によるものかは不明である。この一群は東海地方の石山式土器に対比されるものと思われる。

140～169は器面に条痕が認められる一群である。工具の種類や条痕の状態・胎土などの違いによりさらに細分できると思われる。140～142・152は内外に条痕が施される。胎土には纖維が含まれ、器面には指頭による凹凸が著しい。147は胎土が他に比べて緻密である。148～152の表面にはケズリ状の擦痕が入っている。150・152の胎土には石英の粗粒が含まれる。160～169は胎土が暗灰色で、白色の細粒が多量に含まれている。

170～184は無文のものおよび前的一群に比べ擦痕等が明瞭でない一群である。胎土などにより、さらに細分できるものと思われる。170～172・174は胎土に石英の粗粒が多く含まれる。173・175～184は前の一群より胎土が緻密である。この一群は数時期のものが混在していると思われるが、十分に分析できず、細分することができなかった。

185は口縁の下に3条の隆筋を貼り付け、その頂部と口唇に工具で刻みを入れている。胎土は緻密で、纖維と石英の粗粒が含まれる。東海地方の入海I式土器に対比される。

186～188は波状の沈線が入る一群である。186は刻みの入った口縁の下に太い工具による波状の沈線が入る。他の2点とはやや異なっている。胎土には砂の粗粒が含まれる。187・188は棒状の工具による波状文をもつ。胎土は非常に緻密である。この一群は東海地方の天神山式土器に対比される。

189～193は器壁が厚く、胎土に多量の纖維が含まれる一群である。いずれも細片のため、明確な時期を決定できない。189は撚糸文と思われる縦の条線が入っているが、摩滅のためはっきりしない。内面は横方向のナデ痕が明瞭で、滑らかで焼成も良好である。193の拓影中央部には絡条体によると思われる圧痕が認められるが、摩滅のため明瞭でない。

194・195は土坑150より出土した。口縁の下と思われる部分に小さな段を作り、棒状の工具による刺突を施している。胎土は黒に近い暗灰色で、非常に固い。前期初頭に位置付けられる。

196は補修孔をもつ2片が接合したものである。文様はないが、胎土などから前期または中期のものと思われる。補修孔は両面から開けられている。大きいほうの破片は内面に途中まで開けられた失敗した穴があり、小さいほうの破片の内面の穴にも、少しづれた痕跡がある。

#### 中期中葉の土器（拓影第17図197～203）

図示した7点と他に4点の小破片がII区から出土したのみである。いずれも他時期の遺構の覆土や、遺構外からの出土である。197～202は低い隆筋の周辺に連続した刺突を施している。203は棒状工具による連続刺突で文様を描いている。いずれも胎土は明褐色で、砂の粗粒を少量含んでいる。中期中葉II期に位置付けられる。

このほか図示していないが、調査を行った尾根から一段下の畑で、平出第三類A土器の破片が採集されている。

#### 中期後葉の土器（第11図16・拓影第17図204～第18図232）

土坑および遺構外から出土したものを見た。比較的大きな破片を抽出している。調査区のほぼ全域から出土しており、住居址が検出されたII・III区からの出土量が特に多い。ほとんどが唐草文系の土器で、東海地方のものと思われる土器がわずかに見られる。

第11図16は、第4号住居址の覆土より出土した。文様等より住居址より古い時期のものと思われる。深鉢の口

縁部に付く把手で、側面に棒状の工具の先端による連続刺突が施されている。類例は伊那谷の土器の中に散見される。この土器は文様の連続刺突などから、中期後葉Ⅰ期またはⅡ期の古い段階のものと推定される。

第17図204・205は同一個体と思われる破片である。1986年の調査の際、2号住居址付近から出土した。キャリバー状に開く口縁の上面に2条の沈線を巡らせ、満巻状の突起を付けている。口縁部の外面にも沈線による文様が描かれ、その下には網文が施されている。胎土は褐色を帯びた灰色で、緻密で白色の粒子が含まれている。表面には炭化物の付着が著しい。東海地方の呪煙式土器である。

206～227は唐草文系の土器で、ほとんどが深鉢の破片である。いずれも胎土は明褐色で雲母の細粒が多く含まれている。209は口縁のすぐ下に突起を巡らせ、その上下に交叉刺突文を施している。口縁部の文様帶が省略された特異な土器である。216は浅い沈線で器面を埋めたあと波状の沈線を入れている。220は唐草文の隆帯の端部の渦巻きに連続して三日月状の隆帯を付け、その中に沈線を入れている。拓影中央部の渦巻きと三日月の接点の部分の下側の隆帯は、この部分だけ舌状に大きく張り出している。223は壺型の土器の肩の部分と思われる破片である。227・228は地文の条線の上に沈線で文様を描いている。

229は地文の網文の上に浅い沈線で文様を描いている。230も同様の文様をもち、いずれも深鉢の肩部の破片と思われる。胎土は緻密で白色の粒子が多く含まれる。東海地方の呪煙式土器と思われる。

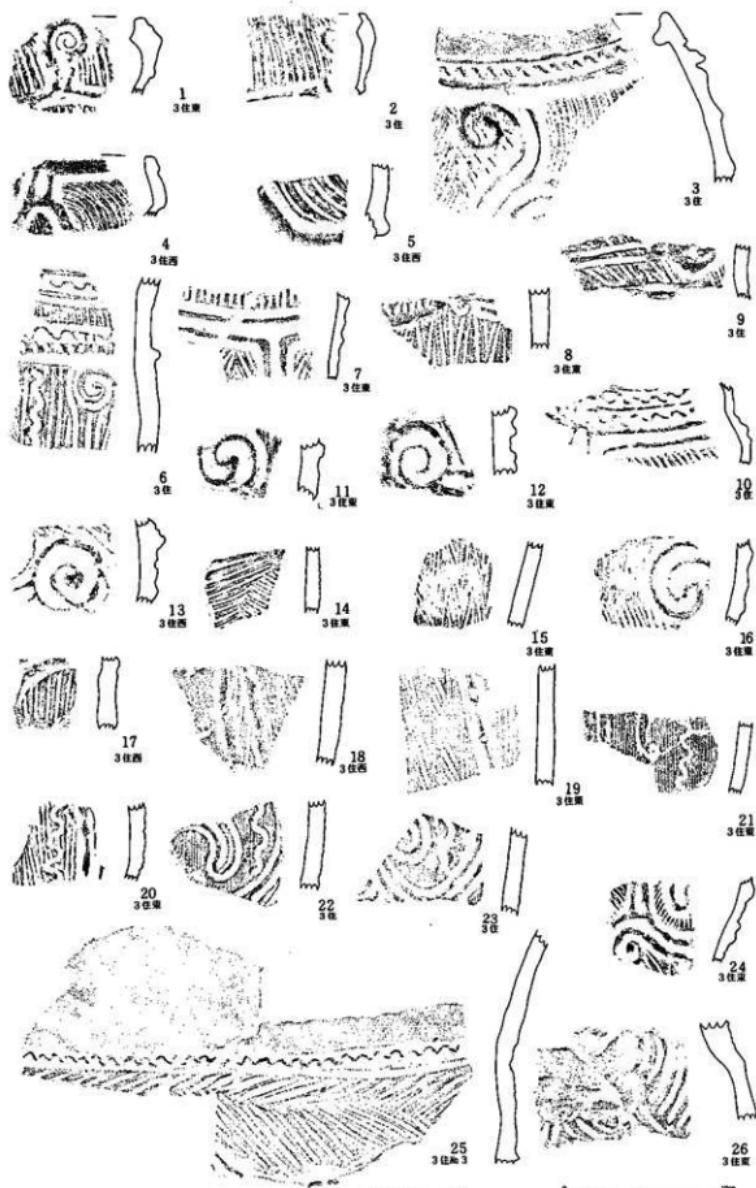
231・232は3号住居址の覆土から出土した網文の施された破片である。全体の文様構成等が不明のため時期は確定できないが、3号住居址と大差はないと思われる。胎土には砂の粗粒が含まれている。

#### 後期・晩期の土器（拓影第18図233～244）

233は口縁部に浅い沈線文を施している。244は網文を施したあと屈曲部に横方向の沈線を巡らせ、その間に鋸歯状の刺突を入れている。胎土は暗褐色で、砂の粗粒を多く含んでいる。いずれも明確な時期を確定できない。235～242は微細な網文と沈線による区画が施される。後期前半に位置付けられる。243は口縁に2条の浅く幅の広い沈線が入る。明確な時期は不明である。244は横方向およびその下の弧状の沈線で文様を描いている。小破片のため明確な位置付けはできないが、晩期のものと思われる。

#### 参考文献

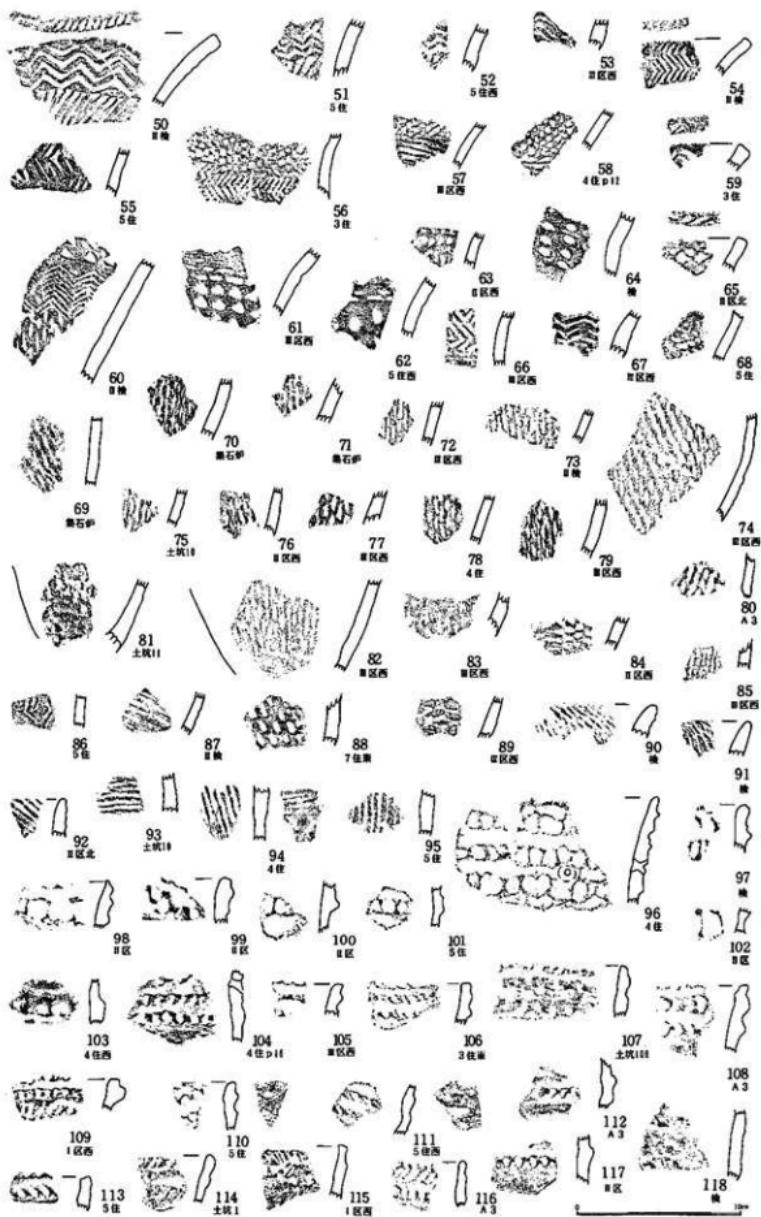
- 大參義一ほか 1965 「北替地遺跡発掘調査報告」「いちのみや考古」第6号  
紅村 弘 1979 『東海先史文化の諸段階』資料編II  
鈴木茂夫ほか 1981 『馬場遺跡概報』足助町教育委員会  
神村 透 1983 「二本木遺跡・稻荷沢遺跡」「長野県史」考古資料編(3) 主要遺跡中信  
下総考古学研究会 1985 「下総考古学」8号  
長野県史刊行会 1988 「長野県史」考古資料編四遺構・遺物  
山田 猛 1988 「押型文土器群の形式学的再検討」「三重県史研究」4  
河野典男ほか 1988 「落合五郎遺跡」中津川市教育委員会  
松田真一 1989 「大川遺跡」山添村教育委員会  
矢野健一 1993 「押型文土器の起源と変遷」「考古学雑誌」78卷4号



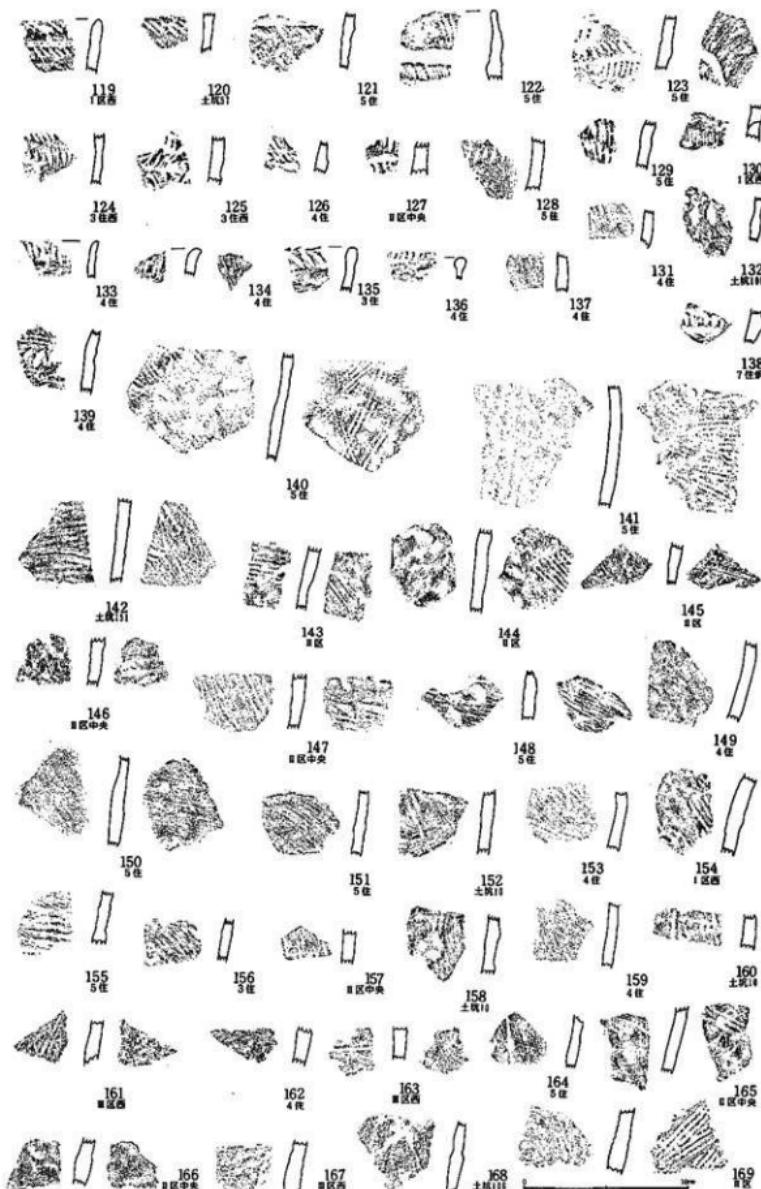
第13図 土器拓影(1) (1/3)



第14図 土器拓影(2) (1/3)



第15圖 土器拓影(3) (1/3)



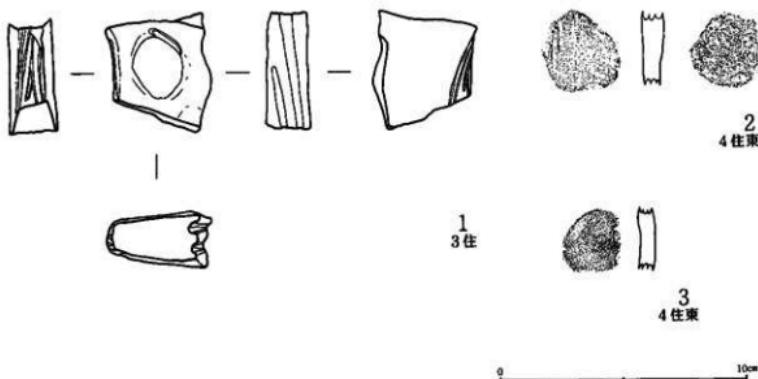
第16図 土器拓影(4) (1/3)



第17圖 土器拓影(5) (1/3)



第18圖 土器拓影(6) (1/3)



第19図 土製品実測図 (1/2)

## 5) 土 製 品 (第19図)

土偶 1 点と、土製円盤のうち、出土した遺構と異なった時期の土器を転用した 2 点を図示した。1 の土偶は第 3 号住居址の覆土の上部から出土した。唐草文系の土器に伴う立像型の土偶の胴部で、板状の胸部の右半分が残存している。貼り付けによって表現された乳房は剥落して失われているが、痕跡が明瞭に残る。乳房の上には沈線が入っている。側面には蜿蜒らしく沈線文が描かれている。胴部中央の破損面は、芯になる粘土塊の接合面で折損し、成形時に入れられた棒状の芯材の痕跡が溝状に残っている。胎土は黄身がかかった明灰色で、砂と雲母の細粒を含む。表面はていねいに仕上げられ、滑らかである。木曾谷では土偶の出土例は少なく、中期のものは 10 例に満たない。いずれも小さな破片で、全形を伺えるものもない。今回出土したものも、小破片ではあるが、貴重な一例である。この土偶は明確な時期を決定できる文様等ではなく、覆土の上部からの出土のため、住居址との共伴関係も確定なものではない。しかし体部の形状や周辺地域の事例等から、住居址とは大差ない時期のものと推定される。

2・3 の土製円盤は、いずれも第 4 号住居址の覆土から出土した。調査の段階では明確な識別ができなかったため、出土状況の詳細は不明である。いずれも早期末から前期初頭の土器片を転用し、ほぼ全周が使用のため摩滅している。土製品として転用・使用された時期は不明である。

## 6) 石器 (第20~26図)

今回の調査では碎片まで含めて953点出土した。洗浄後、石器を抽出して注記を行い、1986年に出土したもの一部と合わせて御アルカに委託して図化を行った。図化は期間等の制約により定型的なものを中心に行った。観察表の掲載は行わず、図示した石器の重量及び石材は図中に示した。石材の鑑定及び、近隣での産出地等は、永井節治氏にご教示いただいた。

今回の調査ではさまざまな時期の遺構が検出されており、各石器の時期を特定することは難しいが、遺構が多数検出された縄文時代中期後半のものが主体になっていると思われる。

概観すると小型の石器には、搬入された黒曜石（諏訪地方周辺産）・下呂石（ハリ賀安山岩・岐阜県下呂周辺産・註1）などの石材と、木曾谷で産出するチャート・水晶などが用いられている。今回の調査では検出された縄文時代中期の各住居址の覆土から、石器に用いられた石材の剝片や細片類がまとまって出土しており、遺跡の中で石器の製作が行われていたものと思われる。正確な統計を行っていないが、おおむね黒曜石とチャートが半々で、わずかに下呂石が加わる。チャートについては都内の露頭の産出石材との同定や、化学分析による産地の推定を行えなかっただため、肉眼観察による所見を記しているが、これについては今後検討して行きたいと思う。

また水晶が少量ながら用いられていることが特徴であるが、これは近接する沢や、谷の奥の台（だな）地区などから産出しており、それらの素材を用いたものと思われる。石器の素材のほかに水晶の原石も今回の調査で多く出土している。

大型の石器では安山岩を用いたスクレーバーがまとまって出土している。石斧には粘板岩や凝灰岩、すり石類には砂岩や濃飛流文岩など、いずれも遺跡の周辺で産出する石材が用いられている。

以下種類別に概観してみたい。

### 1 石鎌 (1~30)

出土した33点のうち、細片を除く30点を図示した。石材別では黒曜石とチャートがほぼ半分づつで、下呂石がわずかにある。23はチャートとなっているが、鉄石英の可能性もある。チャートは水色または茶色のもので、地元で産出するものを使っていると思われる。

### 2 石匙 (31~35)

出土した5点を図示した。31のみ縦型で、他の4点は横型である。横型のものはいずれも、つまみの部分が本体の中心でなく端に寄って作られている。32・34・35の3点は刃部の調整が片側からの剥離で行われている。32は上下の2側縁に両面剥離で刃がつけられている。33は素材の稜が残っており、稜のない方の側縁を調整している。他の石匙とは性格が異なるものと思われる。チャート製の3点は、青みがかった黒の線が入った乳白色または暗灰色の素材が使われており、地元で産出する石材を用いたものと思われる。

### 3 異形石器 (36)

1点のみ出土した。薄い剝片を素材とし、U字型の本体に石匙に似たつまみ部がつく。Y字型になる方向で図化しているが本来の方向や、この石器の用途等は不明である。

#### 4 石錐 (37~39)

出土した3点を図示した。いずれも幅が広いつまみ部に、両面からの剥離で調整した長い刃部が付く形態である。素材は37が水色、38が茶色のチャートで、地元の石材を用いているものと思われる。

#### 5 小型スクレーパー類 (40~89)

出土した77点のうち50点を図示した。素材は黒曜石・下呂石・地元産のチャートなどが用いられている。素材の剥片を最初から意図的に調整してスクレーパーとして利用したもののはか、他の小型石器製作の際の未製品や、製作中の破損品も含まれていると思われる。素材となっている剥片を見ると、際立った規格性はなく、手頃なものを加工して使用しているようである。

43は上部の両側縁を調整し、石匙のつまみ状にしている。44は石錐の未製品の可能性もある。46は図の左上部分に細かい剥離調整を行っている。53・68は石匙の破片の可能性がある。61は下端部の側縁に一方向から剥離を行い、刃をつけている。82は2側縁を調整している。石匙などの破片の可能性もある。88は厚い素材の側縁を調整し、刃をつけている。刃部の先端には使用により潰れている。

#### 6 尖頭器 (90)

1点のみ出土した。素材の一端に両面からの剥離を加えて調整している。

#### 7 彫 器 (91)

1点のみ出土した。自然面の残る素材の一端に、自然面の側から剥離を加えている。

#### 8 砧 石 (92・93)

2点出土した。92は薄い板状の砂岩のほぼ全面が使用されており、両端は折損している。図の下端の部分の中央は、浅く溝状にくぼんでいる。93は大型の板状の砥石の一端が欠け落ちた破片と思われる。長い方の側面の欠損した面以外の3面が使用され、線状の使用痕が認められ、上面には認められない。I区の東側の耕作による搅乱が著しい部分からの出土であり、縄文時代のものではなく、後世のもの可能性が高い。

#### 9 ピエスエスキュー (94・95)

51点出土したうちの2点を図示した。いずれも黒曜石の剥片を利用している。

#### 10 使用痕のある剥片 (95~116)

意図的な剥離による刃部の調整を行わず、剥片の刃部に利器として使用された痕跡が認められるものを一括した。98は大型の剥片で、両側縁に使用痕が見られる。101は左側の側縁に小さい剥離が加えられ、上と右の面の片側には加筆の後がみられる。103は左の図の右側縁の部分が、使用によりえぐられたようになっている。104は図の左側の角度が大きい稜に、使用による刃こぼれが認められる。

#### 11 大型スクレーパー類 (117~128)

出土した22点を図示した。安山岩の剥片の側縁に調整を加えて、刃部を作っている。木曾谷の中期後葉の遺跡ではよく見られる石器である。今回の調査では住居址の覆土などから多量の剥片や細片が出土していることから、

遺跡の中で加工が行われたと思われる。素材の安山岩は地元で産出するものである。形態や刃部の調整方法の違いにより、数種類の用途が想定されるが、素材の形態には規格性は見られない。

117は3側縁を加工している。下側のみ両側から調整され、他の2辺は片面からの調整である。118は上部に自然面を残している。119~121は刃部の角度が大きい。

## 12 打製石斧 (129~132)

出土した4点を図示した。木曾谷の中期後葉の集落遺跡では多量に出土することが多く、出土数が少ないとこ

はこの遺跡の大きな特徴である。129・130は暗灰色の粘板岩を素材としている。131・132は輝緑凝灰岩を素材としている。いずれも表面は風化によって白色になっている。この素材を用いた打製石斧は木曾谷の遺跡では非常に多く見られる。石材は日義村などに岩帶があり、軽石は木曾川なども得ることができる。そうした素材を利用しているものと推定される。

## 13 すり石類 (133~145)

58点出土したうち、13点を図示した。ほかに石皿の破片が3点出土しているが、図示していない。使用された面は図中ではトーンで示している。いずれも遺跡の周辺で入手できる素材を使用している。133は上面と、下端の一部に打痕が認められる。135は表面の一部に被熱による変色が認められる。136は表裏の両面の一部に集中した打痕が認められる。137は木曾駒型のカコウ岩を素材としている。表面は風化が著しい。138は左側の図の表面の数ヶ所に打痕が集中している。左側の側面と裏面の一部は使用によって平坦になっている。139・142の2点は断面が三角状になる、いわゆる特殊磨石で、早期の押型文土器に伴うものと思われる。139は上部の自然面が残る面と折損面を除き、全面が使用されている。142は折損面以外の全面が使用されている。140は表裏の2面が使用されている。両端部は風化が著しく、使用されているのか不明である。141は両面の中央がくぼみ、その周辺が研磨されている。側面の各部には打痕が見られる。143・145は手のひらに乗るよりやや大きい素材を利用している。144は片面の中央がくぼんでいる。上下の両端には打痕が認められる。

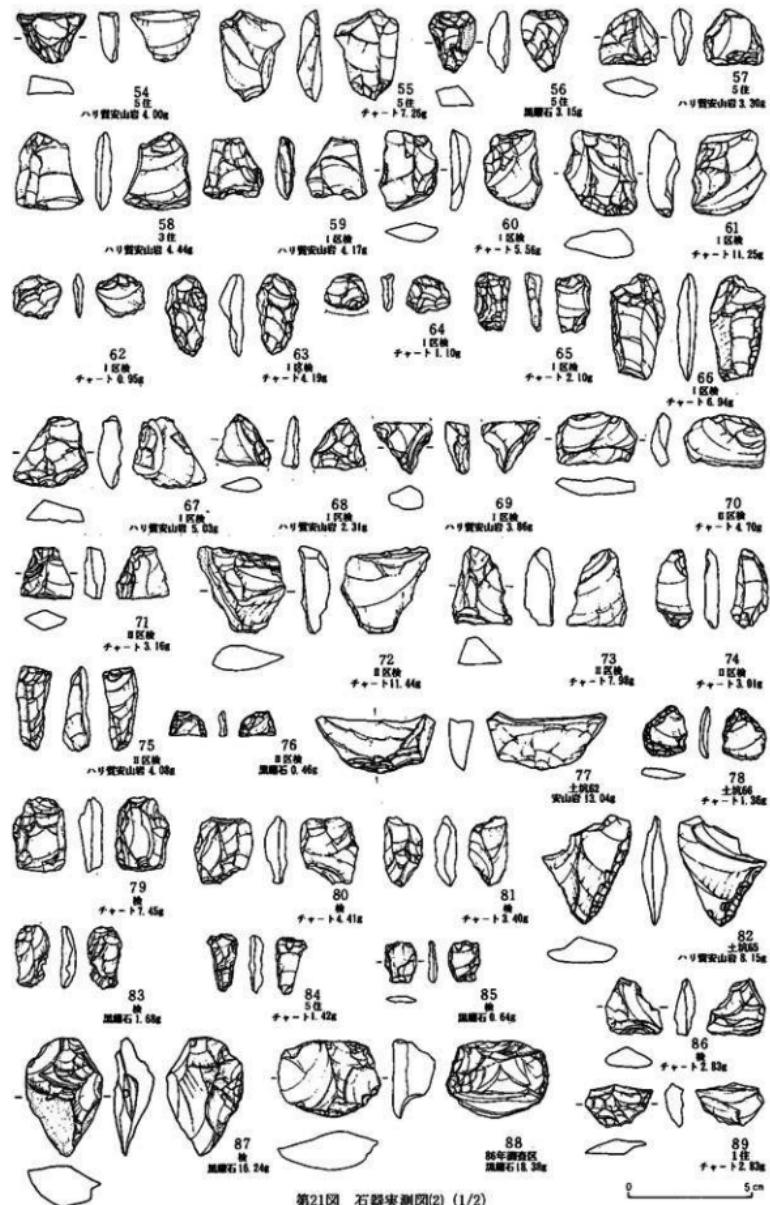
(石器の項は角張淳一氏の分類されたものを元に、筆者が稿を起こした。誤認等の責は筆者にある。)

註1. 下呂石の地学上の名稱については、ハリ賀安山岩のほか、黒雲母石英安山岩など、不明確な点があることを齋藤基生氏が指摘されている（齋藤1993）。本書の図中の表記では、ハリ賀安山岩と表記した。

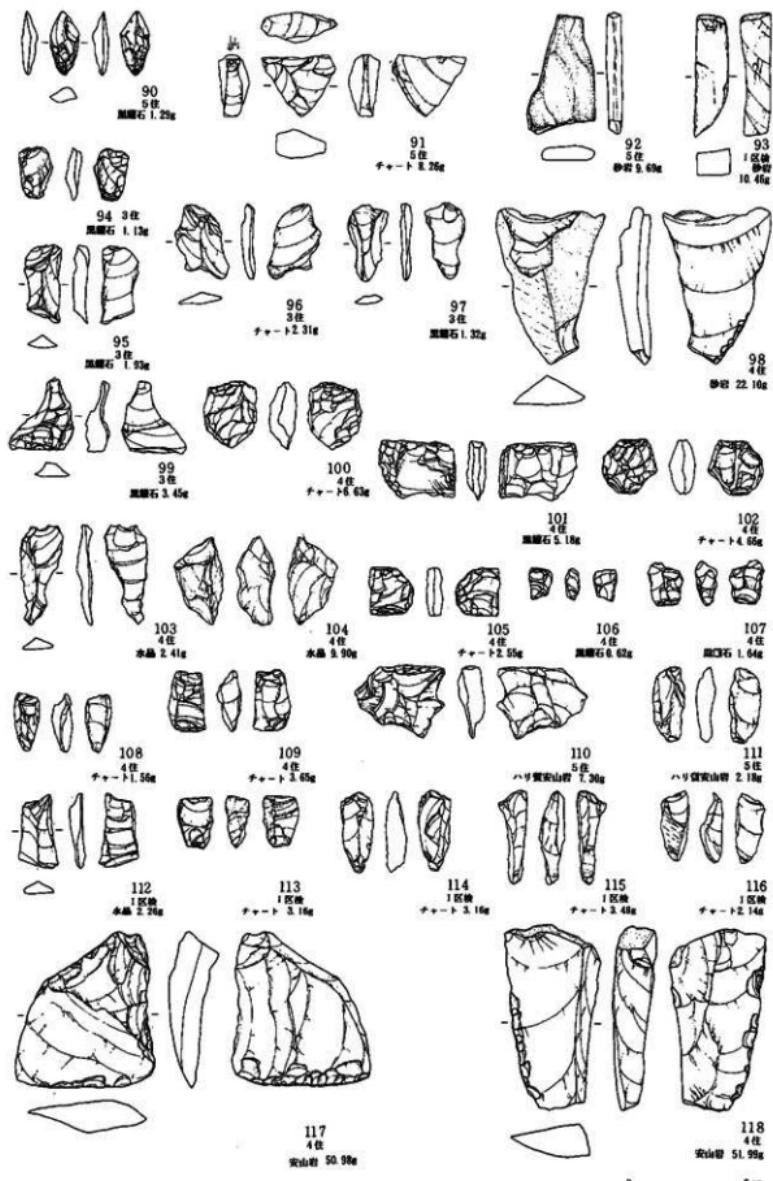
文献：齋藤基生 1993 「下呂石」「愛知女子短期大学紀要」26



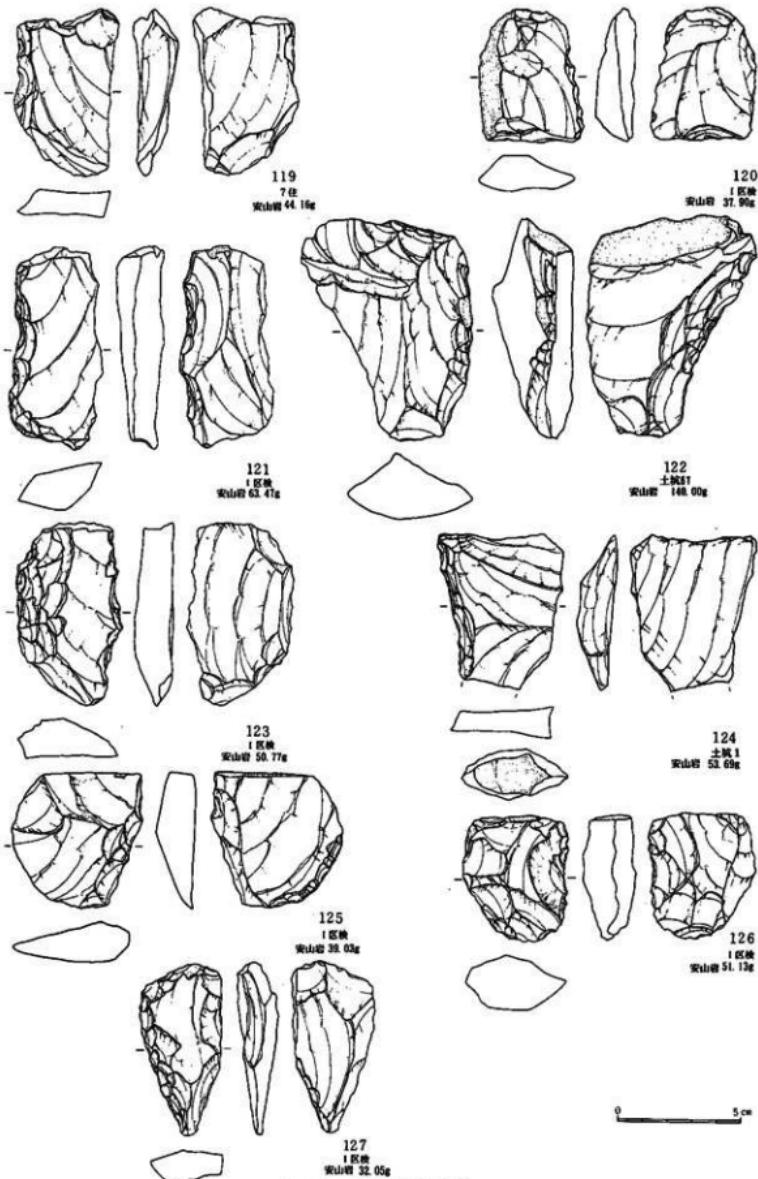
第20図 石器実測図(1) (1/2)



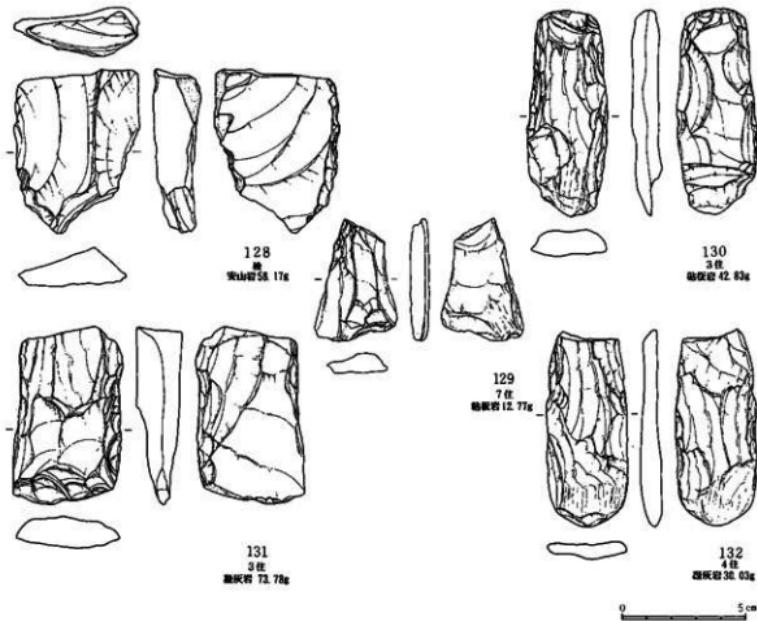
第21図 石器実測図(2) (1/2)



第22図 石器実測図(3) (1/2)

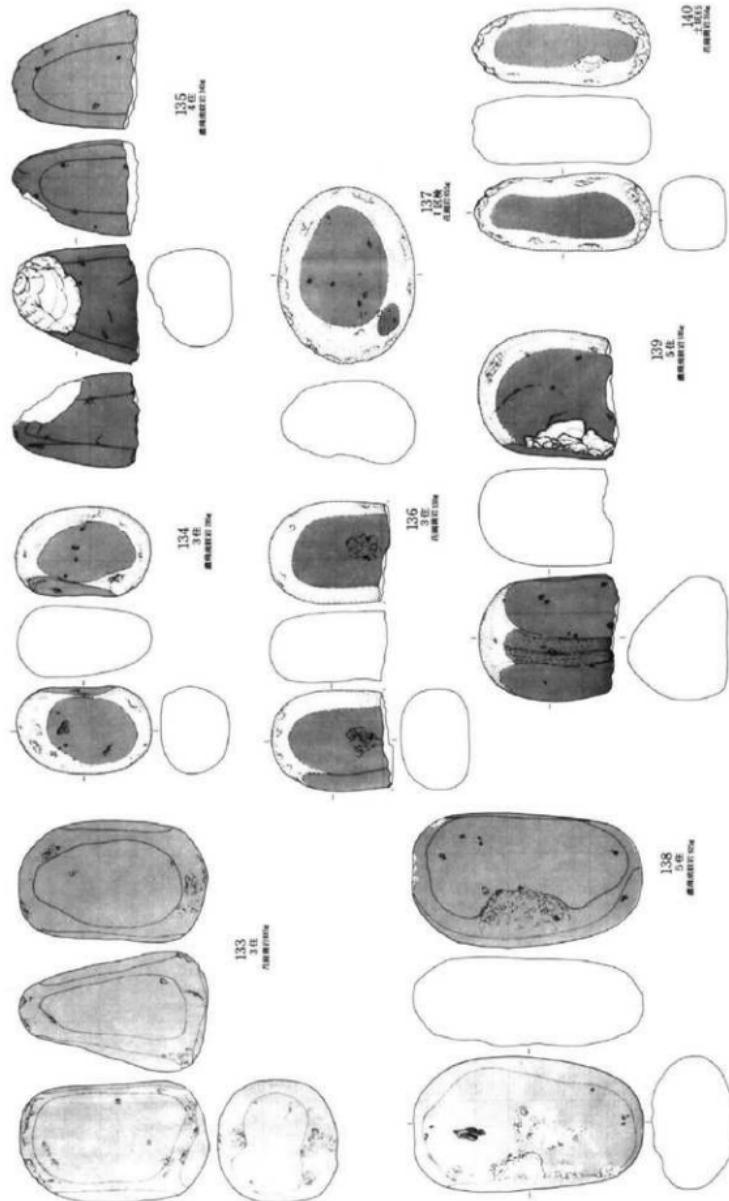


第23図 石器実測図(4) (1/2)

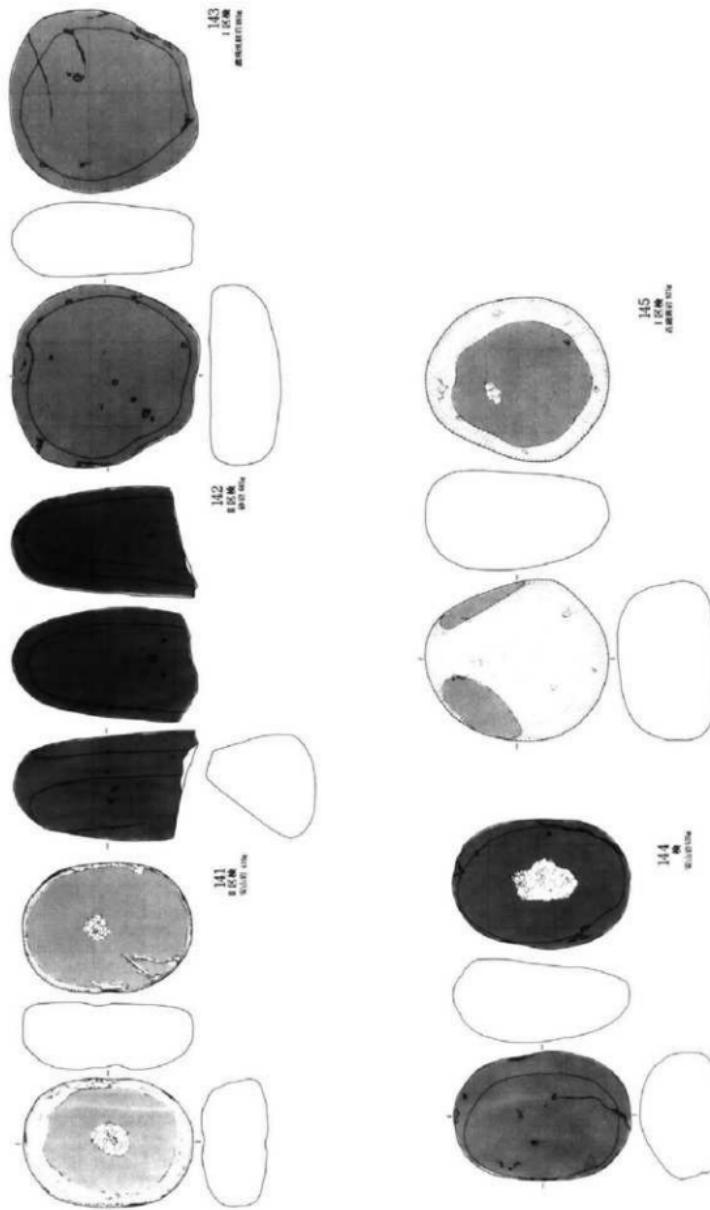


第24図 石器実測図(5) (1/2)

图25图 石器类别图(6) (1/3)



第26图 石器尖削圆7 (1/3)



## 7) 平安時代の住居址 (第27・28図)

### 1 第6号住居址 (第27図)

I区の中央部で検出された。绳文時代の土坑数基を切っている。南側の大半を削平され、北側の一部のみ残存している。1辺約3.5mの方形のプランと推定される。主軸はN-60°-Eとなる。

壁は北側のみ残存しているが状態はよくない。床は地山のロームを固めており、非常に固くしまっている。奥壁側には周溝が巡っている。柱穴は主軸線をはさんで4本が対称に配置されるものと思われるが、はっきりしない。北側のコーナーにカマドがあるが、破壊されていて遺存状態はよくなく、西側の袖の一部が遺存しているのみである。石を芯にして構築されており、中央部はよく焼けている。

遺物は覆土中より少量の灰釉陶器片が出土し、接合して器形が復元できたものが3点ある。(第12図20~22)いずれも確かに残存状態はあまりよくない。20はカマド内と覆土から出土した破片が接合した。表面にやや黄身がかかった稚がかかる。21は口縁から体部の一部が遺存する。器面の荒れが著しく、施釉範囲等は不明である。22は底から体部が遺存する。内面には重ね焼き痕が明瞭に残る。いずれも美濃古窯の光ヶ丘1号窯式期のものである。

このほか刀子の一部と思われる鉄器が出土しているが、保存処理中のため図示できなかった。

本址は出土遺物より9世紀後半に位置付けられる。

### 2 第7号住居址 (第28図)

III区の中央部で検出された。第8号住居址を切っている。床の上約20cmで道路施工時の基礎の掘削面になるため、全体に大きく削平されており、残存状態は不良である。当初第8号住居址と識別できず、掘り下げ中に確認された。床のレベルも第8号住居址とはほとんど差がない、明確に識別できないため、わずかに壁が確認された部分や、カマドの位置からプランを復元した。

1辺が約2.5mの方形のプランと推定され、主軸はN-45°-Eとなる。この時期のものとしては非常に小型の住居である。覆土には多量のカコウ岩の礫を含んでいる。壁はわずかに残存しているが状態はよくない。床は地山のロームを固めており、非常に固くしまっている。柱穴は他時期の構造との切り合いが著しく、明確に本址の伴うと確認されたものはない。北東側のコーナーにカマドがある。破壊されていて遺存状態はよくないが、住居址に比べると非常に大きいものであり、通常のものとは異なる性格を持ったものかもしれない。石を芯にして構築されており、中央部はよく焼けている。

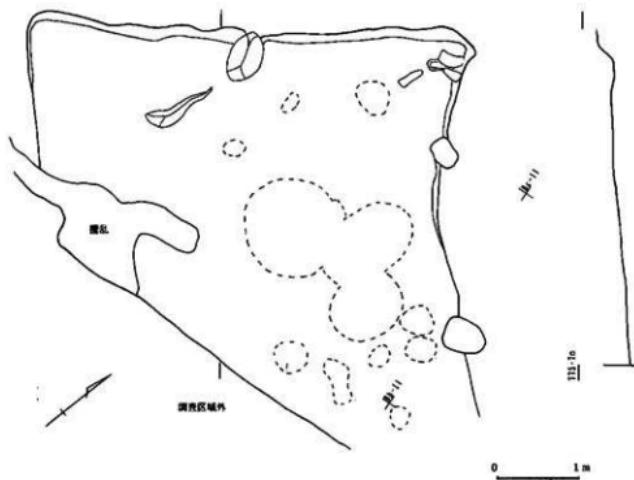
遺物は覆土中より少量の灰釉陶器片が出土しているが、接合して器形が復元できたものは第12図23の確1点のみである。美濃古窯の光ヶ丘1号窯式期のものである。このほか刀子の一部と思われる鉄器が出土しているが、保存処理中のため図示できなかった。

本址は出土遺物より9世紀後半に位置付けられる。

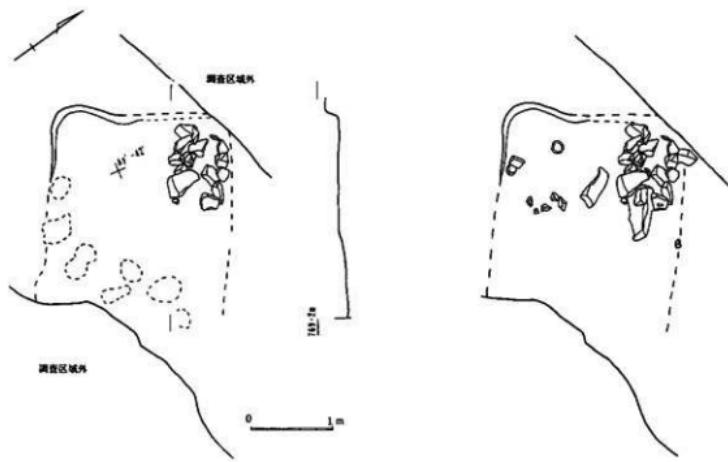
## 8) 古代・中世以降の遺物 (第12図24)

遺構検出時にI区より出土した灰釉陶器の皿である。口縁に浅い輪花が入るが、破片が小さいため単位等は不明である。美濃古窯の光ヶ丘1号窯式期のものである。このほかに小片のため図示していないが、試掘の際I区の南側より11世紀後半~12世紀の白磁のV類の碗の破片が出土している。

中世以降の遺物では陶器の破片が数点出土している。いずれも耕作土からの出土で、小破片のため図示していない。18世紀後半から19世紀のもので、碗・皿・土瓶・香華碗などがある。



第27図 第6号住居址 (1/60)



第28図 第7号住居址 (1/60)

## 第4章 調査のまとめ

今回の調査は、道路の拡幅用地内という限られた範囲の調査であり、遺構の検出などではさまざまな制約があつたが、多くの知見を得ることができた。以下時代別に概観するとともに、今後の課題などを提起してみたい。なお遺跡内での生活の場の変遷については、隣接する最中遺跡も含めて考察を行っている。

縄文時代早期前半の押型文土器の時期には、住居は検出されなかつたが集石炉が検出された尾根の先端の平坦部に生活の場があつたものと思われる。集落の様相をつかめるには至らなかつたが、木曾谷では検出事例の少ない貴重な発見である。出土遺物では西日本系の押型文土器の出土が特筆される。近年関西地方を中心とした地域の調査で、この時期の資料が充実してきて、その様相が明らかになりつつあるが、中部地方の土器編年などとの関連については不明な点が多く、今回の発見はその解明に一つの手がかりとなりそうである。

早期後半から前期初頭では、まとまつた量の遺物が出土しているが、遺構は数基の土坑が検出されたにとどまり、生活の場ははつきりしない。しかしⅠ区や、Ⅱ区の中期後葉の住居址が検出された場所から外れた部分で土坑が検出されたり、比較的まとまつて遺物が出土していることから、この時期の生活の場は尾根先端の平坦部ではなく、縁辺部に近い場所にあつたと思われる。この時期の土器群も、木曾谷では断片的な資料は知られていたものの、まとまつた報告例は少なく、中部高地と東海地方の交流の様子などを解明する上で、これから注意されるものである。

中期中葉では、遺物の出土量が少なく、生活の場ははつきりしない。復元できた土器は1個体のみであったが、東海・北陸地方の影響など、今後の周辺地域との交流の様相を解明する上で重要なものである。

中期後葉では、過去の調査分などと合わせて、非常に狭い尾根の端部に6軒以上の住居址が存在したことが明らかになった。今回は詳細に時期別の変遷の分析を行えなかつたが、少なくとも2時期以上に渡って生活していくと思われる。

從来木曾のこの時期の遺跡では、2・3軒の住居址が検出される程度の断片的な資料が得られることが多く、集落の様相については、未解明の部分が多かつた。今回の調査も道路工事に伴う狭い範囲の調査という制約上、尾根の先端の平坦部の全域の調査を行えなかつたが、多くの知見を得ることができた。

このような事例は、先年調査された大桑村薬師遺跡（現在整理作業中）でも知られており、木曾谷の遺跡の立地や集落の営まれ方を考えて行く上で、基本的な資料になる。

検出された住居址の分布を見ると、尾根が狭いために環状に分布するのではなく、平坦な部分に密集している。住居址の主軸の方向も、入口を地形に合わせて南側か、それに近い方向に向いているものの、特に規則性は見られない。

出土した土器は唐草文系のものが主体であるが、松本平などの唐草文系の土器の分布圏の中心部のものに比べると文様の構成等にいくつかの特異な点が見られる。木曾谷でも北部の櫛川村や日義村の事例では、松本平などと良く似たものが出土しているが、南部の大桑村や上松町の事例ではかなり様相が異なってくる。今回の第5号住居址の埋甕の口縁部下に見られるような横方向の綾杉文が施された事例は、岐阜県の資料の中に散見される。唐草文系土器の分布圏の端部に見られる特徴と思われるが、今後類例の増加を待つて追ってみたい。また木曾谷

の長野県と東海地方などの接点にあたるという地理的な特性が反映され、中期の土器だけに限らないが、東海地方からの搬入品と思われるものや、影響を伺うことができるものが多い。木曾の遺跡では比較的まとまった資料であり、今後の研究においても貴重な資料となろう。

後・晩期になると今回の調査地でも遺物の出土はあったが量は少なく、生活の場は一段下がって川に近い最中遺跡のほうへ移動していると思われる。この中期末以降の低地への進出は、各地の遺跡で確認されているが、木曾でも1つの事例を加えることができた。その背景などについては今後もさまざまなところから検討して行かなければならない課題である。

縄文時代全体を通してであるが、石器も良好な資料が多い。チャートや安山岩を多用することや、水晶を少量ではあるが使っていることは、木曾谷の縄文時代の石器製作時の素材選択や、その供給の様子を解明する上で基本的な資料となるものである。

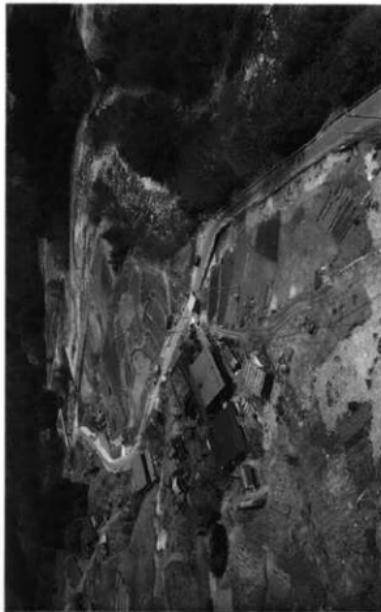
平安時代の2軒の住居址は、いずれも9世紀の後半のものである。この時期は近年の調査で明らかになりつつある、信濃の各地で大きな開拓が行われたのと同期期のものであることが注目される。木曾谷は当時美濃の国に属しており、美濃古窯址での灰釉陶器の生産が始まると9世紀の後半のころには、各地に遺跡が見られるようになっており、美濃から入った人々によって大規模な開拓が行われていたものと思われる。

第7号住居址の住居の規模に比べて大型のかまどは、鐵治など作業が行われたものの可能性がある。これについては金属探知器による鐵造判片の検出等を行ったが確認できなかった。2軒の住居址からの鉄製品の出土等をあわせて考えると、確証はないものの居住者の開拓に従事した工人的な性格を伺わせるものであり、今後さらに検討して行かなければならない課題と言えよう。

平安時代の住居址はこの一時期だけのもので、次の時期以降には継続した居住が行われていない。このような現象は木曾の遺跡では良く見られることであるが、このことから推測すると、周辺の開拓の拠点的な集落ではなく、別の性格を持ったものと思われる。この問題についてもいざれ稿を改めて検討してみたい。

以上諸多に問題点を提起してみたが、今回の調査によってもたらされた資料が内包している問題は非常に大きく、今後の木曾谷の歴史を解明する上で、さまざまな点で重要な資料と言える。今回は時間的な制約等により、十分な考察を行えなかつたが、今後さらに究明して行きたいと思う。

最後に今回の調査に当たっては、調査に参加された方々を始め、多くの方々や機関からさまざまご援助をいただきいた。末筆ながらお礼申し上げ、まとめとしたい。



1 (左上) 最中上道勝全景 (I・II区完施時) 東側上空より  
手前がII区、電柱の奥がI区。  
写真の下側の自動車の止まっている付近が後のIII区になる。

2 (右上) 最中上道勝全景 (I・II区完施時) 西側上空より  
手前側の道路に沿った部分が調査地。  
写真中央やや右よりの川に面した頃が後中當路。

3 (左下) I区全景 (完施時) 西側より  
手前側は谷に向かって落ちはじめ、大きな礫が出ていている。  
中央付近に第6号住居地があり、土坑が散在している。





4 (左上) III区全般 (完掘時) 西側より

手前の段は水田造成時のもの。

中央部右の暗くなっている部分が第5号住居址、その左が第4号住居址。

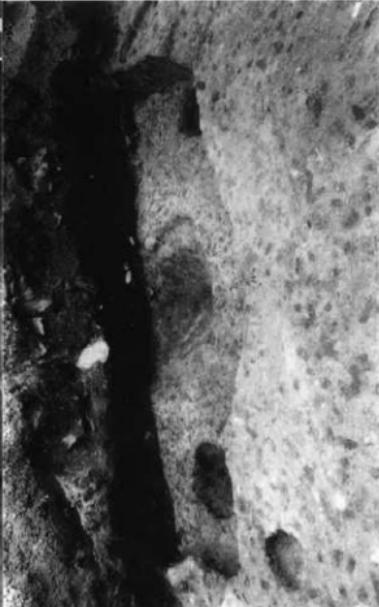
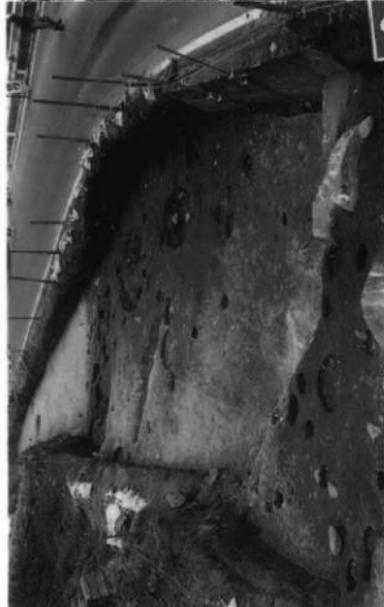
5 (右上) III区全般 (完掘時) 東側より

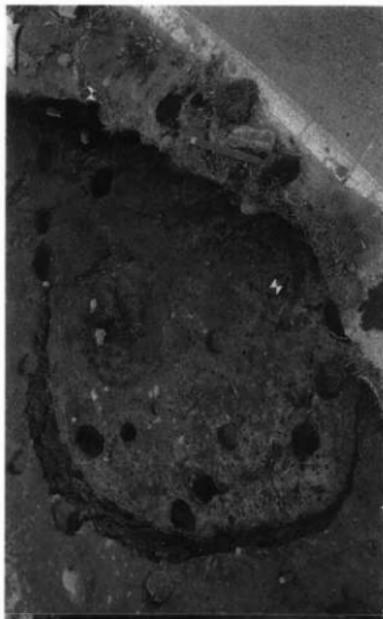
中央左の影の部分が第3号住居址、その右の石垣が例まっているところが、

第7・8号住居址。右側はIII区を埋めた仮設道路。

6 (左下) 第3号住居址 (完掘状態) 北側より

中央に大きい柱があり、中は良く焼けている。



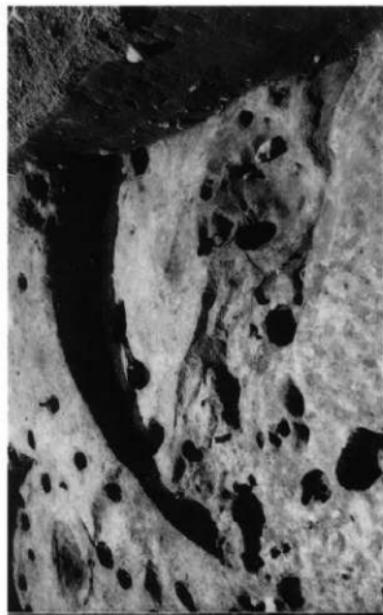


7 (左上) 第5号住居址遺物出土状態 西側より  
カコウ岩の塊が入っている。右の隅には瓦礫が見える。

8 (右上) 第5号住居址 (完形状態) 南側より  
手前の土手の陰に埋蔵の一帯が見える。  
写真右側の木は水田造成時の権杖を受けている。

9 (左下) 第5号住居址埋蔵 北東側より  
埋まつたままの状態で、手前側の半分を掘ったところ。  
土器は、やや斜めに埋められている。





10 (左上) 第4号住居址遺物出土状態 南側より

カコウ岩の礫が入っている。

右側は水田造成時に削平されている。

11 (右上) 第4号住居址 (完掘状態) 東側より

中央部が土手による擾乱を受けている。

削平された部分の柱穴は、写真に入っていない。

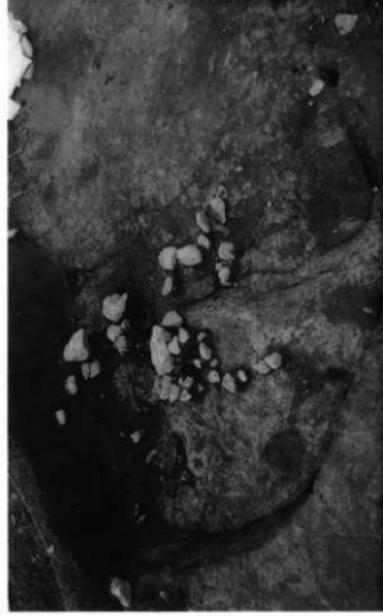
左の礫は第5号住居址。

12 (左下) 第7・8号住居址 (完掘状態) 南東より

第8号住居址の中央部に第7号住居址が作られている。

中央の石の手前側が第7号住居址のカマド。奥は第8号住居址の手前。

写真手前の石列は、1986年に拡張される前の道路の石垣。





13 (左上) 第7号住居址カマド 南東より

芯材のカコウ岩を並べて立てている。

手前側の大きい石材は天井に使われていたものと思われる。

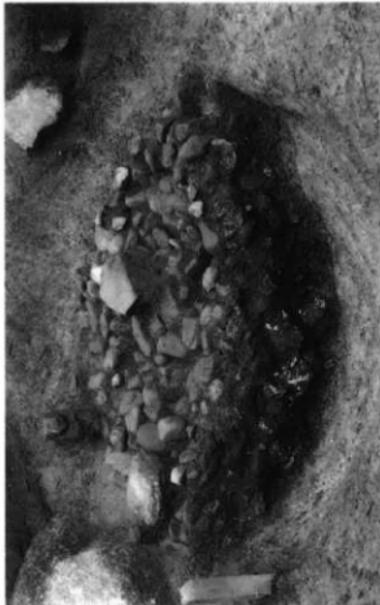
14 (右上) 第8号住居址炉 (完羅社跡) 南東より

手前と右側の石材は、第7号住居址のカマド。

左側の石材だけが残っている。

15 (左下) 繁文時代早期土器出土石器 南削より  
第111回17の土器、内面を上にして出土した。





16 (左上) 集石が (上面検出状態) 北東より  
手前右・奥の大きな石は地山のもの。

17 (右上) 集石が (半載状態) 南西より  
下層の褐色土 (色が濃い部分) には、炭が含まれる。

18 (左下) 土坑150 (完掘状態) 南隅より  
下層の集石がの石が見えはじめている。





19(左上) 第6号住居址(完掘状態) 南西より  
手前側は削平されている。  
右側の大きい孔は縄文時代のもの。

20(右上) 第6号住居址(完掘状態) 西側より  
床面に見られる小さい穴は耕作時の埋具。  
手前側は石垣で被されている。

21(左下) 第6号住居址カマド(完掘状態)  
耕作時に破壊されていて、残りは良くない。



9

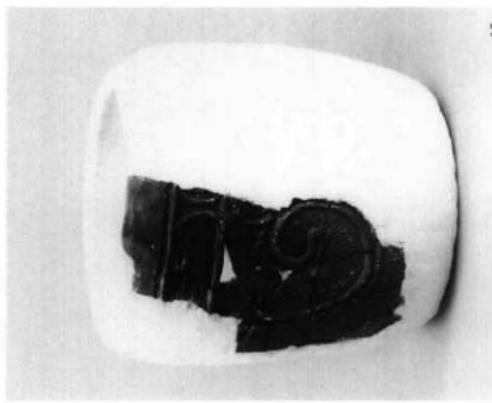


1

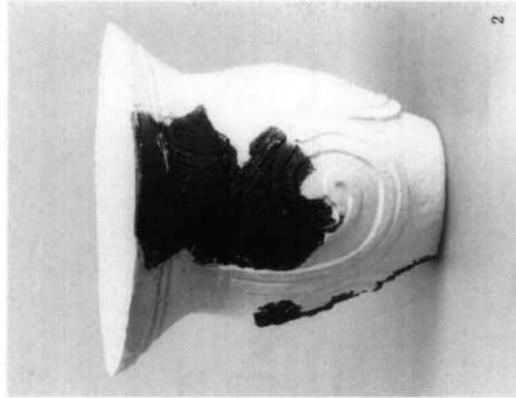


写真図版 8 出土土器 (1)

写真図版 9 出土土器 (2)



18



2



10



8

写真図版 10 出土土器 (3)



17



19 (上面)



19 (側面)

写真図版 11 出出土器 (4)



(左上) 50・51・52・53  
54・55・56

58・57・59  
(左下) 66・67・68・86・87  
70・78・90・91

92・93・94・95  
(右上) 60・61・62  
88・64・80・82



(左上) 石鳥 配置は図と同じ順序。

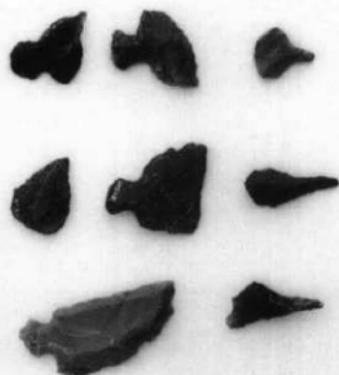
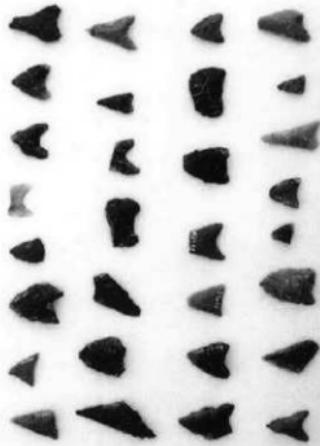
(左下) 石匙 (上2列)・石鍬 (下)

31・32・33

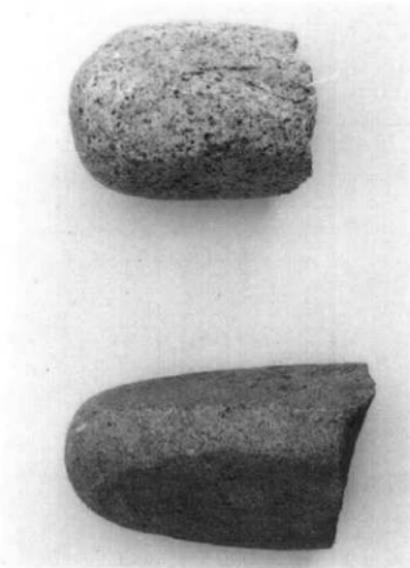
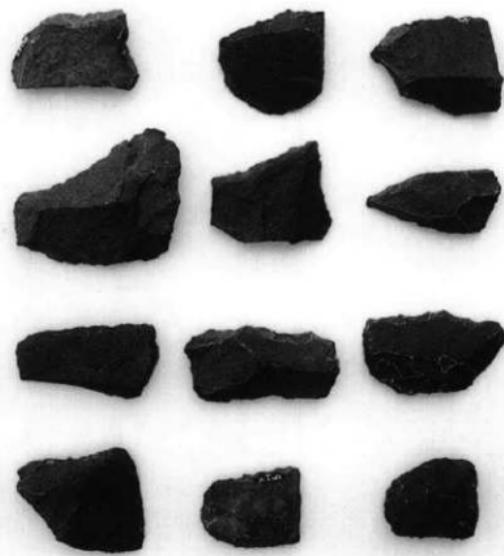
34・35

36・37

(右上) 異形石器 (36)



写真図版 13 出土石器（2）

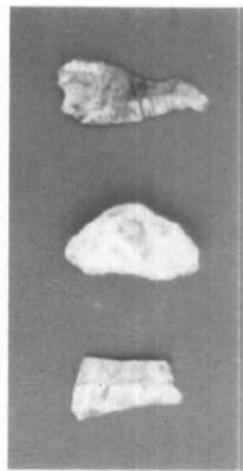


(左上) 安山岩製スクリーナー類  
117・118・122・119

120・121・124・125

126・123・127・128

(左下) 水晶製石器 (112・104・103)  
(右上) 縞文時代早期前半のナリ石 (141・139)



最中上遺跡調査概要（抄録）

フ リ ガ ナ	モチヨウエイセキハックツショウサホウコクショウ		
書 名	最中上遺跡発掘調査報告書		
主 著 者・從 築 者	新谷和孝・村田広司		
発 行 者	木曾建設事務所・上松町教育委員会・木曾郡町村会		
編 集 機 間	上松町教育委員会		
住 所・電 話	長野県木曾郡上松町大字小川1706 0264-52-2111		
印 刷 所	長野市柳原2133-5 鬼灯書籍株式会社		
印 刷 日・発 行 日	1993年11月15日 1993年12月1日		
所 在 地	長野県木曾郡上松町大字小川字最中397番地付近		
25000分の1地図名・位置・標高	上松	北緯 35°46'19" 東経 137°39'58"	標高 770m
概要	主な時代	绳文時代早期・中期後半 平安時代	
	主な遺構	绳文時代中期住居址 4 平安時代住居址 2	
	主な遺物	石器（石器、石斧等） 土器（押型文、唐草文等）	
	特殊遺構	集石炉	
	特殊遺物	前半期押型文土器	
調査期間	1993年2月5日から1993年4月15日		

もちゅううえ  
**最中上遺跡**

-県道改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書-

平成5年11月15日 印刷

平成5年12月1日 発行

長野県木曽建設事務所  
発 行 上松町教育委員会  
木 曽 郡 町 村 全  
印 刷 ほおづき書籍株式会社

